

萬なるものと言ふべきである。普通選挙というても程度問題である。けれども苟くも一戸を構へ納税の義務を負ひ、且また兵役の義務を負ひ、單また一定の職業を持つて居るものであつたならば、必ずや選挙権を持たなければならない。普通選挙は程度問題とは言ひながら、先づ此邊に於て大體の標準を得ることであらうと思ふ。理論上普通選挙の正しいといふことは何人も疑はな

す。
デモクラシーは既に述べしが如く(社會團體研究 録第九號參照)に貴族の權力に反對して以て人民の權力を唱導するといふことに始まつたのであるが、今日となつては之れと趣きを異にし、他の人に與へんことを目的として居る。此點に就いてマーシャリーといふ人の言つた言葉は非常に面白い。

十八世紀に於けるデモクラシーは、個人が當然所有すべきものと思つて居つた所の權利を、他の者の爲に奪はれ、而も之を回復せんとするものであつた。即ち權利に對する強制であつたのである。それで或る哲學者の如きはデモクラシーを以て盜まれたる權利の回復に外ならずとさへ言つて居る。然るに十年來の傾向に就て之を見るに、單に權利を得んとして争ふのみならば、更に一大思想の勃發したものがあつた。何ぞやといふに、吾人は他の人に權利を與へなければならぬ。世界に正義を與へなければならぬといふ事が是れである。正義を與へ

るといふことは權利を得るといふことよりも一層緊急なる一層廣大なる理想となり來つたのである。

と。此説は如何にも能く今日の思想界を形容して居る。デモクラシーは詰まり思想の變遷である思想の變遷が自然に來つたものでありとすれば、之を挽回するといふことは出來ない。世界の根底は思想である。思想を動かすのも思想である。思想以外には思想を動かすに足りるものはない。今思想が斯の如く變し來り、且又其變遷が悪るいものでない限りに於ては、吾人は之を認めざるを得ない。政治上に於て一切人民をして、平等の權利を得せしめんとするのが今日の思想である。

デモクラシーは人格の平等を認むるを以て其の根底として居る。即ち平等主義である。如何なる人をも侮辱することない。如何なる人に對しても人格の差別を立てることはないのである。故に其根底に於ては相互の自由である。一人の人の爲に、自由を拘束せらるゝといふことはない。故に他の一面から見れば、愛情といふ意味をも包含して居る。如何なる人に對しても權利を與へてやり、導いてやらうといふのである。それで平等と自由と愛情と。此れ等三者がデモクラシーの要項になつて來る。

六 デモクラシーの暗礁

此種の思想が、日本の古代に存在して居らなかったといふ事は言ふまでもない。乃至一般世界の古代に於ても存在して居らなかったのである。所謂聖人賢人の書中には之に類する思想がないことはない。孔子は廣く衆を愛して仁に親しむと言つた。衆を愛するといふ以上は、矢張りデモクラシーの思想らしく見える。デモクラシーの思想があつたと言つてもよい。孟子の中にも人に忍びざるの心といふことがある。羊の死ぬのさへ見て之を悲しむのである。人の死ぬのを見て之を悲しむのは人情の常である。孟子の書中にも亦デモクラシーの思想があると云つても差支ない。釋迦に於ても矢張り之と同じことである。殊に釋迦は四姓の打破を叫んだ。けれども社會心意として存在して居らなかったといふことは、前に述べたるが如くである。殊にカントの如きは自由平等を認めただけども、矢張り社會心意としては存在して居らなかったのである。社會心意として存在するといふことは、實に今日以後のことである。然るに茲に一つ考へて見なければならぬことがある。即ち社會には不平等がないかといふとさうでない。人間社會には種々なる點に於て不平等が存在して居る。非常に人格の良き者もあり、徳望の高い者がある。又愚劣にして人

に爪摘きせらるゝ者もある。又忿怒し易き者もあり、怨恨し易き者もあり、邪僻なる者もある。人の性格に種々様々あるが、之に應じて矢張り人格的に階級のあるといふことは免れないのである。更に又腦髓に就て之を見ても、非常なる考を蘊蓄したるものもある。何等蘊蓄のない白紙の如き者もある。前者は自ら人の注意を惹き、人に敬服せらるゝといふ點から言つても矢張り人間には階級がある。更に又膽力才氣に就て之を言つても、或る者は人を使ふ、人の上となるに足る。又或る者は人に使はれるだけに止つて居る者もある。同じく土方にしても、親分となるに足る者もあり、それだけの度胸の無い者もある。矢張り階級の存在するといふことは免れない。是等は明かに階級である。同じことを標準として其の間に上下の區別があるのである。人間が平等だといふ事が果して言へるであらうか。何人が見ても明かに差等があるのである。どつちが値打があるかといふことは直ちに分る。若し是等の區別を無視して、總て人間の値打が同様であるとしたならば、世の中は馬鹿の集合になつて仕舞ふ。是に於てか平等といふことは何を意味するかといふに、つまり一般的に、社會心意としては平等の取り扱ひをするといふことに外ならないのである。政治的に平等の權利を享有し、社會的に平等の機會を與へてやるといふのである。其れ以上に於て階級の有るのは免れない。此點からいふとデモクラシーは一種の平等主義である。

自然の心理作用から言へば人に長たる膽略才氣の有る者や、非常なる學問の有る者や、又は徳望の有る者は自ら人の上に立つ。人に敬服せらるゝ。目に一丁字ない無智文盲なる者と同等といふことは、つまり社會が同時に取扱ふといふ一種の主義に外ならないのである。さういふ主義が社會心意として出來て來たのである。

又生活の程度に就て之を見ても、金の有る者は自動車に乗り、西洋料理を食ひ、輕裘を纏ひ、避寒避暑、以て長壽を保つことが出来る。貧しき者は垢の付いた衣服を着し、粗食を食ひ、寒いからというても働き、暑いからというても出掛けなければならぬ。天然の壽を全うする事も出来ない。是等をも平等に取り扱ふといふのは如何なる意味であるか。今言つたやうに政治上に於て社會上に於て同等の權利平等の機會を授けてやらうとするのである。特別に一人に厚くすることがないのである。言ひ換へて見れば社會心意として一方に厚くし、一方に薄くするといふことはないのである。或は又國家の意志として一方に厚くし、一方に薄くするといふことはないのである。之が即ちデモクラシーの精神である。平等主義である。

家柄の上から言へば數百年連綿として繼續して居る名門もあり、又は古來社會の最下層として擯斥せられて居つた者もある。けれども社會心意として又は國家心意として一人に厚くし、一

人に薄くするといふことはないのである。それにも拘らず一人に厚くし、一人に薄くするといふのは、個人的心理的作用である。個人的心理的作用は、決して消滅するものではない。此點も亦注意すべきことである。職業の上から見ても肴屋もあれば官吏もある。是等が同等だといふやうなものゝ、肴屋は其數が甚だ多いし、總理大臣といへば兎に角同時に二人はない。矢張り總理大臣の方が尊く見らる。總理大臣になりたといふのは萬人の心理である。従つて個人的心理作用として、其間の區別を認めない譯には行かない。けれどもさうかと言つて、社會意思として總理大臣のみに厚くして、肴屋に薄くするといふことは出來ない。之を平等に見るといふのはデモクラシーの精神である。

然らば平等に見るといふ、即ち不公平がないといふデモクラシーの社會的精神と、それから、人間に階級を立て區別を立てるといふ、個人的心理的作用と矛盾することがないかといふに大いにあるのである。唯社會精神が次第に勢力を得て來るが爲に、個人的の心意は次第に勢力を失つて來る。昔の人であれば依估最負の不公平が當然と思つたものだが、今日の人は當然だとは思はない。従つて時代が進歩すれば、遂には悉く社會を平等に見るといふやうなことになるかとも限らない。一個人の腦髓の中に於ても、人格の區別を立てるといふことが無くなるかも知れない

けれども未知數である。

兎に角に今日此區別を立てるといふことが無くなつて仕舞へば、社會は暗になる。必ずしも利口にならうといふ者もなくなつて来る。人は他の人の上に立ち他の人を支配し、他より勝れたる人格になるといふ希望があればこそ勉強もする。即ち區別があるから勉強する。即ち支配と云ふ慾望が存在して居る以上は、矢張り人格の階級といふことは、誰の腦中にも離るゝことは出来ない。而してデモクラシーが社會心意となつて来るのと常に衝突して居る。さうしてデモクラシーを以て唯一個の主義たるに外ならないといふことに看做して居る。即ち主義は主義であるけれども、自分としては人格の區別を認めざるを得ないといふことになつて来る。デモクラシーが人格の平等を認めといふと云ひ、愛情を包含すと云ひ、自由を主張すると云うても唯一種の主義であり運動であつて、理想的の状態でないといふことは之を以ても明瞭である。即ちデモクラシーの思想は非常なる暗礁に乗り掛けて居るのである。此暗礁の爲めに、破壊せらるゝことがないとも限らない。

即ち人間は是非とも階級がなければ満足は出来ないものである。區別がなければ安心して居られないのである。亞米利加の如き貴族もなければ平民もない。一切が自由平等の國に於て何を希望

するかといへば、矢張り勳章を希望するのである。此位彼等の心情を喜ばしむるものはない。吾々階級主義の日本の國に生れた者から見ると、馬鹿げたことではない様だけれども、亞米利加に於ては不可思議である。けれども人情である。勳章を貰つた位階を貰つたといふと、之を以て無上の光榮として居るのである。日本の富豪の如きにしても矢張り之と同じである。金は既に澤山滿つた。それ以上の希望は勳章を貰ひたい、華族になりたい位階が貰ひたいといふ以外、何ももない。少しでも人の上に優れたといへばそれで満足するのである。社會の人も亦前述の如く、種々なる方面から人格の階級を立て、家柄の區別をして居る。であるから階といふことは是非とも免るゝことは出来ない。これは單に道德上の問題で、人情の自然でありとすればそれまでであるけれど、人情の自然といふ所に於てデモクラシーの實現には限界がある。デモクラシーは官人の階級的精神を打破し、特權階級を打破するに於て、一切の人に平等の機會を與へる點に於て非常によい所があるけれども、それ以上道德までも支配することは出来ないから、畢竟一種の主義として而かも教育の進歩に伴ふ必然の勢ひとして見らるべき所の運動、又は傾向と言ふべきものである。故にデモクラシーは理想ではない。固定したる主義である。人文主義は人間を教育する、同様にすると云ふ教育的意味を含んで居る。故に平等と不平等とを調和する唯一の喫子であ

る。

第三章 生活と人格

一 社會は勞働の組織

一 勞働の上下二種

勞働問題も亦デモクラシーの思想の一種である。デモクラシーの中の一部分に外ならない。勞働が絶對の價値あるものであるものであることは言ふまでもない。人間の生活は、勞働に依つて維持せられて居るのである。

然れども勞働にも亦種々なる區別がある。肉體の勞働は最も低級なるものである。何故に低級といふ。最も動物的であるからである。精神を勞することが多いに従つて、段々に高級になるのである。此區別は必ず存在しなければならぬ。如何に勞働者に同情すればとて、又如何に勞働の價値を認むればとて、此區別を認めぬといふことは有り得ない話である。肉體は誰でも之を持つて居る。其の肉體を働かせるといふことは子供にも出来る。人間の特色は其の精神の發達にあ

る。動物進化の上に於ても明かに分つて居る。人間の中に於てもより多く精神を勞し、誰にも出来ないといふやうなものは、是れ最も高級なるものと言はなければならぬ。斯の如き高級なる精神勞働がなかつた日には、社會は其の秩序を失つて仕舞ふ。何人も肉體を持つて居る。此は當然のことである。精神を働かせるが爲に、肉體を多く使はないだけのことである。初めより唯肉體の勞働に慣れた者であれば、肉體だけを使つて居るのである。精神勞働に慣れたものでも、精神が要らぬとなれば肉體だけを使ふことになる。學校の先生の多くは此れである。

肉體の勞働は得易いけれども、精神の勞働は得難い。況して最高級の精神勞働などは、容易に得られるものでない。斯の如き最高級の精神勞働が無くてよいかといふに、何人もさうは思はないのである。最高級の各科學研究が無かつた日には世の中は暗である。一例を擧げるまでもないが、物理學の高尙なる知識があるが爲に電氣が分かり、電氣が分つた爲に無線電信が出来た。無線電信が出来た爲に、之に伴ふ種々なる設備が出来。勞働者なども多く使用さるゝやうになつて居るのである。最も高尙なる精神勞働がなかつたならば、世の中は活動しない。最高級の精神勞働の貴重であるといふことも、疑ふべからざることである。斯の如き最高級の精神勞働は、何人に依つても供給せらるべきものでない。特別なる人に依つて供給せらるゝものである。肉體勞働

は何人も之を供給し得るものである。故に肉體労働の價值が、精神労働に劣るのは固よりである。

社會は次第に發達する。其處に動かす可らざる價值がある。僅かの歲月にして行つた仕事は値打がない。日本の衣服の如きは誠に無雜作なものである。不合理のものである。けれども、數十年來の經驗に依つて見れば、之が一番よいのである。胸も温まり、手の餘裕も出来る。足も窮屈でない、身體をして自由ならしむるには、是れ位よい者はないのである。如何に改良服が出来ても遂に破れて了ふ。理屈だけでは物は出来ない。文明の進歩と共に一夜造りの物が出来る。昔は數百金を投じ、數十日を費やして造つた山車も、今日では一夜の中に造つて仕舞ふ。雨に濡れ、風に吹かれて破れても惜くはない。けれども昔のは惜しい。何事に由らず。長く掛かつたものは大なる價值がある。數百千年來言ひ傳へたことには眞理がある。支那に於ては、孟子が心を勞する者は人に食はれ、力を勞する者は人を食ふと言つた。希臘に於てアリストテレスが、又同様のことを言つて居る。

αριον δε ψυται και αρμοτιερον δια την καρδιαν.

今日と雖も矢張り誰でも斯やうに考へて居る。之を惡むといふものはないのである。力を勞

する者が下になり、心を勞する者が上になるのは當然である。上下と階級を付すれば、筋肉労働が精神労働に劣つて居るといふことは明かである。

二 労働は人格の發現なり

労働は其の何れのものたるを問はず。悉く神聖なるものである。如何となれば、労働は國際労働法規の第一條にもあるが如くに、單なる貨物と同様に見えるべからざるものである。労働は人格者の行動である。人格を以て絶對なるものであるとすれば、其の發現たる行動も亦絶對の價值を有たなければならぬ。人格を以て神聖なりとすれば、労働も亦神聖にして侵すべからざるものに、労働者の代表となるといふことは、大學教授の神聖なる職掌と兩立しないとあつた。こは抑も精神労働と肉體労働と價值の差異あるといふこと、労働の神聖といふことを混同して居るのである。より多くの價值ある労働が神聖だと思つて居るのであつて愚論である。筋肉労働も神聖なる點に於ては毛頭變りがない。寧ろ大學教授に就ては疑ふべき所がある。何ぜなれば學者である以上は學問の爲に盡さなければならぬ。眞理を眞理の儘に吐露しなければならぬ。然るに

大學教授は官吏である。官吏服務紀律に従はなければならぬ性質のものである。官吏は上官の前に服従しなければならぬ。故に上官が斯の如き講義はすると言へば、することは出来ない譯のものである。彼の京都大學の某博士の如きは、一朝にして馘首されたこともある。大學教授は官吏として見れば誠に詰らぬものである。其講義も官吏服務紀律に従つて居る所の講義である。官僚講義である。學問の講義ではない。官僚の講義をするものとすれば、是は唯命ぜられてするものである。自己の意思に基いてして居るものでないのである。して見れば大學教授の職掌が神聖だといふのは、殆んど自己の力を諒解せざるものと言はなければならぬ。それから見れば筋肉労働は精神的の意味がない。人格の簡單なる行動である。けれども労働に由て社會が組織せられ、人命が維持せらる。又他の一面より見れば、肉體の労働は肉と血との分離である。人の血と肉との其の人に特有なる者として最も貴重である。此點から見ても神聖といふべきである。

故に労働の價値は其人格に固有なるものであるから、之を奪ふといふことは出来ない。之を奪はんとするのは、即ち其人格を傷ける事となつて来る。是に於てか労働問題に就ての最大根本原理が起つて来る。何ぞや。人の頭をはねるのは不道德なりといふことが是れである。世の中には多數の人を集め、之に働かして其の頭をはねて贅澤に耽つて居る者があるが、是は大なる不道德

な行爲であるといふことが是れである。そこで困難なる問題は、如何に労働の價値を見積るべきかといふことである。之に就ては容易に決定することは出来ないから、今茲には述べない。

二 労働問題の真相

労働問題は不隨意的に拘束せられ、奴隸の如く使せらるゝ労働者を救済せんとして起つた。其の後一般に労働者の生活状態を改良せんとするに至つた。彼等は從來資本主の命ずるが儘の賃銀を得て、以て一定の場所に於て労働せざるを得なかつたのである。然るに資本主の方は莫大の利益を収めて居るものもある。是に於てか資本主の利益を割いて、以て労働者に支給するといふことを唱へ來つたのである。然れども今日の労働問題はそれ以上である。労働者は資本主より溫情的に接せらるゝことは好まぬ。何ぞなれば、自分の人格に害があるからである。資本主より憐憫せられることは好まぬ。若し斯の如くすれば、矢張り己れの人格に害あるからである。多くの労働者の中には従順なる者もあるから、事實に於てはさうでないものもあるだらうけれども、社會の風潮を爲しつゝある所の労働問題の真相は、實に斯の如きものである。労働者は資本主と同等の地位に立たんことを希望して居るのである。彼等は労働に相當なる報酬を受けば満足である

といふのである。

一面より見れば古代の資本家は實に亂暴であつた。労働者に對して一定の給料を支給する約束をする。それで承知ならば好し。承知でなければ止めろといふのであつた。而して己は非常なる利益を占め、贅澤三昧に暮らして居る。今日の人情は是とは違つて居る。資本家が贅澤をすることが出来る以上は、労働者に對しても衣食の途を阻へてやらなければならぬ。労働者の御蔭で贅澤をすることが出来るのである。して見れば労働者をも、眼中に置かない譯にはゆかないのである。斯ういふのが今日の人情となつて來た。つまりデモクラシーの思想と同じである。デモクラシーに於ては、他人に權利を與へることを希望する。正義を與へることを希望するといふのであるが、今の資本家も矢張り労働者に賃金を與へ、衣食を與へることを希望し來つたのである。又さうなければならぬのである。此點は社會主義の最も文明に貢献したる所である。それだけ人情が發達したものと言はなければならぬ。

けれども労働者は其點では満足しないのである。資本家の爲に衣食を足らして貰ふ必要はない。唯労働相當の報酬を得ればよいといふのである。是は最も公明正大なる意見である。

三 勞 資 合 資

然らば此目的を達するには如何にするかといふに、労働者と資本主と兩者合せて以て一工場を建設するより外ないのである。資本家は資本に對する利益以上の利益を食ふことは出来ぬ。労働者は労働に對する報酬以上を食ふことは出来ぬ。之に就ては自分は社會國體研究録の第八號の冒頭に簡單に書いて居るから今茲には繰り返さない。

所謂合資會社の社員には資本を提供する者もあるし、又勞力を提供するものもある。同じく社員である。同じく社員たる以上は、何れを上とし何れを下とする事もない。工場に就ても之れと同様にするがよい。即ち工場を建設する上に於ては、資本を提供するものもあるし、勞力を提供するものもある。所謂事務員ばかりでない。労働者自身が矢張り社員となつて仕舞ふのである。之に依つて以て労働者と資本主とが、同等の地位に立つことが出来る譯である。資本はあれども資本家なしといふのがよい。資本家といふと利益を食ふといふ意味がある。資本が無くてはならぬが、所謂資本主といふものが唯資本に相當する利益を收めればよいのである。それで一番困難な問題はどうかといふと、労働者の労働は如何に見積るかといふことがそれである。給料で見積

つてもよいが、矢張り資本として金に換へて見積らなければならぬのである。例へば労働者の労働を以て二千圓とか三千圓とかに見積る。決算の時之に相當する配當をやるのである。其會社が成立する迄は、労働者は何等の收入が得られない。それにて満足しなければならぬ。それにて満足出来なければ、矢張り資本主の恩恵に浴することになる。資本主の恩恵に浴すれば、同等の地位に立つといふことは出来ぬ。若し資本主の恩恵に浴しながら、それでも同等の地位に立たんとするは、是れは強請の類である。斯の如く卑劣なる精神を以て、労働問題に臨まうとするのは思想を暗黒に導くものである。資本主も亦労働者に對しては、何等温情の必要はない。温情といふことは労働者を侮辱したる話である。各々労働の報酬を得て以て満足しなければならぬ。其の代り労働者の方でも朝に來て晩に去るといふやうなことは出来ぬ。多少の考を以て當らなければならぬのである。其の位の考のない人間であつたならば、矢張り資本主と同等の地位に立つ事は出来ぬのである。今日の所思想の趨向は前述の如く、資本主と労働者と同等の地位に立つといふ所に居りながら事實に於ては中々是に達して居らぬ。

四 労働者の位置

イ 労働者に偏重す可らず

労働が商品の中に包含せらるゝ唯一の共通的要素であることは、マルクスが資本論の開卷第一に於て詳論したる所である。マルクスに依れば使用價值は其物の性質に従つて異なるが、交換價值は其の中に包含せられたる労働に依つて計らるべきものである。従つて労働は即ち商品の價值を定むる唯一の標準となる。労働を包含することが多ければ價值が高いし労働を包含することが少なければ價值が少ない。即ち労働を重んずる所から、遂に労働者に同情するやうになつて來る。然れども労働者は必ずしも肉體労働者許りでない。其の商品を作るためには、其の労働者の性格を作る教育家が必要である。教科書を作る學者も必要である。外敵から保護する警察官軍人も必要である。労働者許りでは出来ぬ。然らば労働者を保護し、養成するために一切が犠牲になつて居るのであるかといふに左様でない。労働者も亦一般人民のために、犠牲になりつゝあるかといふに左様でない。相互であることは何人も承知して居る。獨り労働者のみを重視すべけんや。唯從來輕視されて居つた。故に重く見る様になつて來たのである。例へば佛蘭西の十九世紀初頭に於ける社會状態は、所謂資本家跋扈の時代であつて、労働者は其下に呻吟しつゝあつた。是に於てか、労働者の爲めに立てる人物が續出した。英吉利に於ては、今より百年前既に労働問

題が盛んに論議せられて居つた。即ち労働者の地位を高めんとするのである。マルクスの如きは學問的組織的に之を論じたのである。

ロ ストライキの成功は國體に在り

所謂労働運動の中心ストライキは英吉利に於て多く成功した。舊獨逸に於ては労働者は、服従を主とすべきものとして教へられて居つた。従つてストライキにして成功せるものは極めて少ない。千九百四年より千九百八年に至る獨逸統計局の發表に依て見るに、平均一年に二十七萬九千八百七十七人の同盟罷工があつた。千九百九年より千九百十三年に至る間には、平均數年々三十二萬七千五百九十三人である。千九百十四年に於ける同盟罷工の數は千五百十五であつて、其の中に於て全然成功したものは、僅かに百分の十七に過ぎない。百分の三八・一は一部分成功したに過ぎない。百分の三八・五は全然失敗に終つた。斯の如きは即ち政府の勢力乃至一般に當局者の勢力の強きが爲めである。千九百十二年に於ては同盟罷工の百分の四・八%が成功したのみであつて、二六・九%は一部成功し、六八・三%即ち同盟罷工の三分の二以上は何等の結果を得ることも出来なかつた。獨逸の同盟罷工は、一般に哀れなる状態に陥つたと云ふことは之に依て明かである。尙ほ他の國に於ける同盟罷工と比較すれば、一層明瞭なるものがある。即ち英吉利の統計表

に因て見れば、大不列顛及び愛蘭に於ては千九百十二年のストライキは百分の二四・五%成功し、一一・%は一部成功し、其の失敗に終つたものは一四・三%に過ぎない。白耳義に於ては同年のストライキの四五・三%が成功し、一三・八%は不成功に終つた。和蘭に於ては二七・五%は成功し、三二・四%は失敗に終つた。即ち如何に獨逸に於て個人の権利の重んぜられざるかを知るべきである。同時に英國に於ては如何に個人の権利が重んぜられ、從て又労働者の勢力の強いことを見るに足りる。千九百十九年鐵道従業員五十萬人のストライキあり、其の要求する所は甚だ莫大であつた。首相ロイドジョージも其の要求に應ずることが出来ず。種々なる手段を講じて之れに對抗した。其の時は政府が勝つた。それでも首相ロイドジョージも労働者の機嫌を取ることゝ努めて居る。國家の消長を顧みずして、斯く迄頑迷にストライキを實行すると云ふことが、自覺ある國民のなすべき事であらうか。兎に角國體に由りて、ストライキの成功不成功は分れる。

ハ ストライキの弊

英吉利の資本家は、斯の如く度々ストライキを實行せられるよりも、寧ろ投資を止めて銀行にその金を預け、利子にて生活する方が遙かに安樂であると啣ちつゝあると云ふことである。又中産階級同盟があつて、以て労働者の同盟に對抗せんとして居る。

それで我日本に於てもストライキが盛んに行はれ、労働者の要求が續々容れられるやうになつて來て居る。一體資本主が人の頭を刎ねると云ふ事も宜くない。儲け過ぎるといふ事はない。資本主のけれども其程度は分らない。銀行利子の二倍や三倍では、儲け過ぎるといふ事はない。資本主の苦心、危険（ヒヤ）資本を寝かす事等を考へなければならぬ。損をして居る時をも考へてやらねばならぬ。労働者は此れ等の時を考へない。儲かる時を考へる。若し労働者の要求をして言ふが儘に容れしめたならば、其の結果は如何になり行くだらうか。八時間制度が變じて七時間制度になり、六時間制度になるかも知れない。即ち樂をして金を取るやうなことになるのである。全體の觀念を發達せしむるにあらざれば、勞資協調は六ヶ敷い。即ち人文主義が矢張り理想となつて來る。

二 労働者の報酬

茲に於てか考ふべきことは労働者に對する報酬問題である。資本家が人の頭を刎ねると云ふことは宜くないけれども、労働者に對する報酬と云ふものも亦考へて見なければならぬ。今日の社會に於て、大學卒業生に對する報酬と、小學卒業生に對する報酬と同様で宜いか。そのみならず中學卒業生と、小學の卒業生と同じで宜いか。勿論仕事にも由るが、苟も知識を必要とする勞

働に於ては、小學卒業生よりも中學卒業生の方が高いのが當然である。其の能率に於ても効率に於ても、乃至は品率に於ても貴重なるものがあるからである。今若し小學卒業生をして中學卒業生よりも價值あるものたらしめ、多くの報酬を拂ふ様になれば中學に入るものは減少する。社會は單に筋肉労働のみを重んじてしまふ。精神的文明を喜ばないやうになつて來る。或は云ふ。精神的事業は道樂にするものである。報酬の爲にするものでない。報酬は單に筋肉労働にのみ存するものである。然れども斯の如きは曲説たるに過ぎない。一の社會に於て筋肉労働の必要であると云ふことは素よりであるけれども、精神労働と云ふことも、亦之を認めなければならぬ。若し精神労働がなかつたならば、筋肉労働は施すに所がない。高尚なる無線電信を考へる者があればこそ、無線電信に關する事業が續々として發達するのである。空中飛行機を考へて呉れるやうな高尚なる精神的勞力があればこそ、空中飛行機に關する事業が起つて來るのである。即ち精神労働がなかつた日には世の中には何等の事業も起らない。精神労働の尊重すべきことは今更云ふべきでない。而も空中飛行機を考へるとか、無線電信を考へるとか云ふ者は澤山あるものではない。容易に出來難いからである。所が筋肉労働の如きものは肉體を備へて居る以上は、何人でも之を提供することが出来るのである。即ち熟練しなければ出來ないと云ふことだけであつて、

如何なる人でもやりさへすれば出来る。數の少ないものでおまけに勞力を籠めたる物が高くして、勞力を籠めない物が安いと云ふことは、マルクス自身の書物に於て明瞭なことである。マルクス自身も言つて居るではないか。ダイヤモンドの如きは、非常なる勞力を掛けなければ發見することが出来ないから價値があるのである。普通の貝は容易く之を發見することが出来るから値打がないのである。即ち高尚なる精神勞働の如きは非常なる努力の結果として始めて得られるものである。遊惰に日を暮らして居つては、到底茲に到達することが出来ない。精神勞働は高尚である、貴重であると云ふことは素よりである。筋肉勞働のみを尊び、精神勞働より以上の報酬を得んとするが如きは間違である。故に今日社會が根本的に其報酬問題に於て改められざる以上は、勞働の報酬も亦知識の程度に於て授けられると云ふことは矢張り一方面的標準になることと思ふ。

ホ 冷やかに對等たるべし

斯く言ふと直に吾輩を以て勞働に同情がない。勞働問題を理解しないと非難する者もあるだらうけれども、吾々はさうは思はない。勞働問題と云ふものは、資本主と勞働者と對等の位置に立たしめると云ふので、資本主は勞働者に温情を以て當ることは宜くない。温情を以て來る人を雇

人と見るのである。人を哀れなる者と見るのである。無禮千萬な話である。勞働者の方でも資本主に憐まれると云ふことがあつては面白くない。兩者對等の位置に立たなければならぬのである。古來の如く主従の考は宜くない。況んや奴隸視せらるゝが如きは、極めて宜くないのである。勞働運動の根底は所謂人格問題であるけれども、報酬は別問題である。若し腦髓を勞して色々の計劃を立てることは、非常な高尚な精神作用であるからして、それに因て受ける利益の大なるは當然である。何等計劃する所もなく唯單に身體を勞して居るだけであれば、それだけの報酬が得られぬと云ふのも亦然るべきことである。報酬の高に依て人格を左右しやうと思ふのは、男らしからざることである。餘計金を貰へば自分の人格が高くなるのだと思ふのは、町人根性、奴隸根性である。斯の如き根性が入つて居るやうであつては、到底勞働問題など理解する能力がない。否口を勞働問題に藉りて社會を怠惰に導かんとするものである。假へ勞働者は一面に収入なしと雖も、而も資本主の奴隸たることは出来ない。茲に勞働者の人格の偉大なる所が見えるのである。勞働者に對する報酬としては、世間普通の報酬でなければならぬ。今や世間普通とは何ぞやと云へば、漠然としたることであるけれども、單に筋肉勞働であつたならば、高尚なる精神勞働者よりも安い者と云はなければならぬ。一言に云へば誰にでも出来る仕事であれば其仕事に

對して報酬の少ないのは當前である。誰にでも出来る仕事に對して多くの報酬を與へるのは社會が悪いのである。既に不健全なる状態に陥つて居るものである。

へ 僥倖の非

何人も僥倖にして多くの金を得ると云ふことは不道德である。例へば同じ程度の労働者が二人ある。一人は某會社に入つたが爲に莫大なる賃銀を得るとする。他の一人は他の會社に入つて、低額の報酬を得ると假定する。此場合に於て前者は自分の力に不相應なる報酬を得たものである。即ち不當利得と云はなければならぬ。斯の如き報酬を受けるの價値なくして、之を得たのであるからして、其良心に耻ぢなければならぬのである。後者は即ち自分の腕に對しては餘りに少なる報酬を受けて居るものであるから、是又憤懣すべきである。餘計やらうと言つて貰はないのが當り前である。又少ないのであつたなら、自分の腕を信ずる以上は更に多くを要求するのが當前である。腕次第に依て報酬を受けなければならないのである。今日は何でも給料を高くすることばかり努めて居る。仕事の難關を問はぬ。却つて簡單なる仕事をする者が多くの給料を得て居るやうな状態である。荷人夫の如く身體を勞すれば則ち足れりと云ふ者が、一日貳圓五拾錢、參圓甚しきに至つては四圓五圓の日給を得て居る。然るに五六年熟練するに非ざれば達せられざる技

術を要する仕事にして、矢張り一日壹圓七八拾錢から貳圓位の日給に止まつて居る者もある。是等は不健全なる状態と云ふべきである。是は一部々々の事であるから、茲に論じないが筋肉労働者のみを重んずる餘弊である。それで中産階級の如きは精神を勞して居る者である。筋肉労働者より以上の報酬を受けべきものである。若し筋肉労働者をして中産階級の仕事をなさしめたならば、多くは出来ないであらう。其の代り中産階級の人をして労働者の仕事をなさしめたならば、多量として餘裕あることが出来るのである。

ト 労働を重んずる習慣

けれどもそれをしないと云ふのは何であるかと云ふと、社會が一般に労働を重んじない、労働者を重く見ないと云ふ處から來つた弊害である。そこで今後労働を重んずる習慣を養ひ、中産階級のものと同様に労働に従事するの習慣を奨励し來る時には、遂に數多の労働が提供せられて従つて労働者の報酬をして其普通の状態に歸らしめると云ふことが出来るだらうと思ふ。一戸の家に於ても女中を使ふことは宜くない。成るべく總てのことは自分でするやうにするが宜い。又學問に従事して居るものであれば出来ぬけれども、さもないものであつたならば、植木の手入れをする如きは自分でやるが宜い。又工場等に於ても一日に二時間或は三時間は、其方面に勞力を

注ぐやうにしても宜い。何でも労働を多く提供するやうにするが肝要である。

筋肉労働は社會の根柢であると云ふことは云ふ迄もないことである。けれども餘り筋肉労働者のみを尊重して來ると云ふと、其結果は文明を退化することになつてしまふ。労働のみが跋扈すれば美術もなければ學問もない。無味乾燥なる社會になつてしまふ。此社會状態は最も寒心すべきものでないか。殊に我國の如き労働者として言ふならば僅に三百萬内外の事である。小作人の如きは非常に多い。此多い方面の問題を考へずして唯單に労働者のみの方面の問題を考へるのは社會の不均なる状態と云ふべきである。労働問題はデモクラシーと呼應して起り來つたものである。其の根柢に於て人格問題を包含して居ると云ふことは云ふ迄もない。労働者の人格の向上發達を希望すると同時に報酬問題は矢張り労働の相場によるべきものであらうと思ふ。資本主の如きにしても或る一種の事業を始めて、それに依て一の工場を設立するものとすれば、其資本主の精神的労働に對しても亦相當の報酬を與へなければならぬ譯である。其資本主の高尙なる精神作用に對する報酬は、労働者の百人二百人に對する報酬に値するかも知れない。吾人は一概に資本主に同情することは出來ないけれども、亦一概に労働者に同情することも出來ない。萬事は其實際に歸らしめんことを期待するのである。

五 生活の必要條件

1 相互心の發達

荒れ果たる社會状態は過去のことと屬する。今日に於ては總てに手を入れやうとするのである。例へば土地である。昔は手の届くだけ之を占領した。所謂優勝劣敗の状態であつた。然れども土地は空氣や水と同じやうなものである。人間が此世の中に生れて來る以上は生活せざるを得ない。故に古來生存權などいうて居る。今日此様な陳腐を繰返へす必要はない。空氣を吸うて初めて生きて居るのである。一人が空氣を占領してしまふと云ふことは、他の人を殺すこととなる。殺人罪である。水の如きも矢張り之と同様である。水を占領してしまふは、不道德の行爲と云はなければならぬ。之と同様に土地も亦人間生活に取つて必要缺くべからざるものである。空中に生活することの出來ない人間に取つては、必ず土地の自由を許してやらなければならぬ。然るに先きなる者が多大の土地を占領してしまふと云ふと後の者は身を置くに所がない。今日に於ては差支ないかも知れないけれ共、將來を考へると不道德の行爲である。人間が澤山に生れて來て其の境界線まで詰め寄せても、其の土地に侵入することが出來ないで重なり合つて呻吟して居

る。宛も陋範の中に多くの難が押し込められて居るやうな状態を演じて来る。是等の有形物に對しても相當の制限を加へるは、社會道德の上より見て當然のことである。

暴利取締令の如きは、社會道德の上から見れば最も必要なことである。吾輩は昨年米騒動以前に於て既に米麥の買占は、間接に人を殺戮するものであると論じた。一人の奸商が如何に米を買ひ占めたからと云つても、二百萬石か三百萬石位で、其の全高は知れて居る。けれども他の者が又眞似をする。又賣り惜みとする。相場は上る。食へない者が出來て來て、栄養不良に陥る者が多くなる。其の結果死に至る者さへある。即ち初に買ひ占めをした人間が殺したものと云つても、決して過言ではない。米麥を買ひ占めする商人は、極悪無道の者と云はなければならぬ。衣服の如きも矢張り之と同じことである。總て人間生活に取つて必要缺くべからざるものを買ひ占めして其の相場を騰げ、人間生活を脅かすが如きは道德上の殺人罪である。法律上に於ても最も嚴重なる制裁を加ふべきである。

之に反して社會に於て有害無益なる物を買ひ占めて居る所の商人は、金儲をすると同時に善なる行爲と云つて宜い。けれども其の目的は自己の利益を増加するにあるから、必ずしも大に賞めたことではない。唯結果が多少賞むべき點があると云ふのである。例へば贅澤品なる香水の如き

是れである。此の買ひ占めは人間生活に取つて何等不安定を來す憂ひはない。のみならず此の買ひ占めは人間をして贅澤をなさらしむる事になるから、或人は云ふのに斯の如き商人に對しては勳一等を與へるか、又は少くとも子爵位與へたら宜からうと。けれども、是は寧ろ戲談である。

ロ 人情の變遷

それで自然の儘に放任し、奸商をして暴利を恣にせしめ、強慾の人をして自由に土地を占領せしむるが如きは、社會を整理し人間を幸福に導く所以でない。之に對して制限を加へる必要がある。制限を加へんとすることは時代思潮であるのである。荒れ果てたるまゝに放任するのは過去のことである。吾人は優勝劣敗を以て、社會自然の状態として居つた。然れども今日の時代思想は之と異なり、「社會は共同生活である。相互に依頼して以て生活しつゝあるものであるから、弱者を助けて行かなければならない」となり來つたのである。それで工場主にしても従來は一定の給料を當がつて、それにて勝手にせよ、食へなければ食はずに居れと言つたものであるけれども今日はさうでない。己が贅澤をすることが出来る以上は、矢張り労働者にも相當の報酬をやらなければならぬといふことになつて來たのである。人文主義の特徴は最も善く労働問題に見はれて

居る。廣く言へば社會最下層の者をして其の人格を向上せしめ、其の生活を維持してやらなければならぬと云ふことになつて來たのである。此の思想は實に社會主義等の持つて來た者で大に珍重すべきである。即ち社會的相互の感情が發達し來つたのである。社會は相互である。相互維持である。此の精神はデモクラシーにも勞働問題にも共通である。

六 勞働者の自覺

英吉利や亞米利加の如き社會であると云ふと、勞働者の數が非常に多い。勞働階級と云へば殆んど一般人民を代表する事になるけれども、日本の如きは僅か二百五十萬か三百萬。單に勞働者と云つては穩かでない。必ずや一般民衆と云はねばならぬ。一般民衆は主として、肉體勞働に頼つて生活して居るものである。人民の利害休戚と云へば、即ち此階級の利害休戚である。公民政治の時代には國家の利害休戚は單に公民の自覺如何によつて決定された。專制君主の時代には勿論君主に由てのみ決定せられた。今日は民衆政治の時代となつた。勿論理屈の上から云へば、民衆政治なるものはレーニン、トロツキー等の政府の如く、片手落ちの者である。人民全體の政治でなくてはならぬ。即ち人文主義の政治でなくてはならぬ。然れども新たに一般民衆をも包含し

たる政治は、民衆の自覺を以て最大の原動力となす。何んとなれば其の方面から新たなる習慣たなる元氣の期待せらるべきものがあるからである。然らば其の自覺は奈邊に存するかと云ふに、我は勞力に依て生活して居るものであると云ふことを自覺し、其の標準的狀態を以て總てを律する様になつて來なければならぬのである。今日の所日本の勞働者乃至一般世界の勞働者は自覺して居らぬ。彼等の自覺々々と云ふは何であるかと云へば、單に生活の向上を圖ると云ふことに過ぎない。唯單に資本主を窘めると云ふことに過ぎない。是は低級なる自覺である。勞働社會の理想とすべき自覺でない。現在に於て理想の手段としては取るに足らぬ者である。如何となれば彼れ等は人格に於て平等たらんとするの道程に上らぬ。人文主義的の進路に進まぬ。而して階級闘争といふ横道に外れて居るからである。其の上彼れ等は卑怯千萬である。獨立自尊の氣概がない。彼等は單に中産階級の眞似をせんとしつゝあるのである。日曜日に會社に出ると云ふと職工らしくて面白くないと云ふ。即ち官吏が日曜を休むから其の眞似をしたがるのである。又一日八時間勞働をしたがるのも衛生上修養上からの考へでなく、多くは賃金上、然らざれば官吏が朝八時晚四時であるから、其の眞似をせんとして居るのである。見下げ果てたる精神と言はなければならぬ。若し勞働者が眞に自覺して居り、眞に見識あるものであつたならば、我は勞働者であ

ると云はなければならぬ。世界の形勢を見よ。一日八時間位の労働を以て我日本を發達せしむることが出来るか、此點に着目して見なければならぬ。我は一日十時間の労働をする、一日十四時間の労働をする、彼の官吏社會は如何。役所に行けば新聞を読み、雑誌を読み、又は煙草を吸ひ、茶を飲んで居る。而して數多の人を使つて居る。冗費も亦甚しいと云ふべきである。人員を淘汰して冗費を省かなければならぬ。我は日曜日も休まない。中産階級の者と雖も日曜も出て勉強せよと、此位に自覺して來なければならぬのである。斯うなると社會を指導する所の氣運が労働者階級に集まつて來るのである。之が眞正の自覺である。若し八時間労働にしても唯單に報酬問題よりするのであつたならば、我等は必しも之を非難しない。又狩り集められたる、工女を苦使する密閉する工場に向つて、八時間労働を主張するのなれば素より之に賛成する。けれども自由なる工場に於て八時間労働を主張すると云ふことは、其の意味を理解することが出来ない。唯中産階級の眞似をしたがるのでは、労働者の自覺は未だ足らざること甚だしいと云ふべきである。之にては國家が労働化して労働者の世界になると云ふことは思ひも依らぬことである。馬鹿氣た話にも程がある。

政治學上の理論としてストライキを許すこともあり、亦サボタージュを許すこともあるけれど

も、道徳上から考へて見ると大に宜くないことである。サボタージュの如きは不當利得の一種、或は詐偽取財の一種と見ても宜いのである。男から云ふと拗ねて居るものと云つても宜い。男らしからざる行爲である。其の結果は如何と云ふに、小兒が拗ねさへすれば物が貰えると云ふことになる。サボタージュを行ふ職工の一家族は全然腐敗してしまふ。不良少年も此處から發生する。又ストライキにしても小學校を卒業したばかりの者が、工場に這入つてストライキを行ふ。度毎に一層高き報酬を得るやうになつたとしたならば、其の結果は矢張り墮落になる。彼等は努力の感を伴はないで、無賴漢的に金を取ること許り勉める。

元來報酬は勞力に相當すべきものである。本人に相當すべき者である。事業に相當すべきものである。企業家に利益があるかないか。損をしたからと云つても、企業家は金を注ぎ込まなければならぬ。職工には給料を拂はなければならぬ。其の代り利益のある時には利益を收める。丁度相場をやると同じことである。相場をやる者は利益があつたからとて、社會に撒いてしまふことはない、利益がないからとて、社會が相當の禮をすると云ふこともない。此れは相場に伴ふ自然の成り行きである。企業家も之れと同じである。大に利益のあることもある。ないこともある。労働には平行しない。此れは本人の自由意志である。然れども人と契約する場合には相當の

報酬を拂はねばならぬ。之が社會の秩序を維持する所以である。小學校の卒業生で工場に這入つた者が、此工場が儲かるからと云つて一日に三圓も四圓も報酬を貰ふとしたならば、是れ其の子供を毒すること甚しいものである。勉強心を阻害する者である。何等努力を伴はない。悪銭は身に着かない。本人は善い事をしない。社會に大なる悪影響を及ぼして来る。茲に於て注意すべきことは、資本主なる者も己れの利益を顧みるに熱心なる餘り、唯儲かるに連れて法外な報酬をやることは宜くないことである。資本主の多くは衣食階級である。中産階級にも達しない。況して人文主義には餘程間隔がある。社會の秩序などいふことは考へない。人に多くやつて却て人を賤するといふ教育的意味を顧慮しない。

社會大多數の人に僥倖心をソソノカスのは宜くない。又小學校卒業の生徒であると、大なる金を得ても之を使ふ途を知らない。總て知識の程度の低い者が金を得ると云ふことは、子供に正宗の名刀を授けるやうなものである。其の害測り知るべからざるものがある。今日社會に於て澤山の労働者があるけれども、それらの労働者は金が儲かれば費つてしまふ。自己の地位を高めると云ふこともあるかも知れぬが、甚だ少ない。中産階級と雖も金があれば、餘計使ふのは通常のことである。けれ共中産階級は主として貯蓄する傾向を有つて居る。従つて自然に教育の爲めにな

るやうになつて来る。今労働者となると云ふとさうでない。子供は義務教育を終れば、直ちに工場に入れてしまふ。で、程度も低いから貯蓄の必要も感じない。又其日々の生活に慣れて居るものであるから、取れたからと云つても矢張り貯蓄する氣が出て來ない。「國政」中「産」参考要するに低級階級に於ては、豫算を立てないから貯蓄心がない。月給であると云ふと豫算が立つ。日給であると豫算が立たない。自然豫算と云ふ腦髓が失くなつてしまふ。其日々々々を見るだけであつて其月を見ない。其月を見るだけで其年を見ない。斯の如き状態であつては、到庭貯蓄は出來得べき筈はないのである。故に戰爭中各所の遊廊は大繁昌をした。又各所の小料理店、レストランの類は何れも繁昌した。近頃或る二三の會社からの話に依ると、此頃は職工の給料が上つて割引電車に乗る者が比較的少なくなつた。辨當を取るにしても、前には饅頭、蕎麥のかけを取つて居た者が、今度は偶には親子丼を取ると云ふやうに驕つて來た。此驕りが詰り生活の改善だと云へばそれまでであるけれども、どの途それだけ樂になつたのであつて同時に貯蓄心のないと云ふことを示して居る。割引電車でも結構間に合ふものであり、又饅頭のかげだと云つても間に合はない事はない。昔の士族ですら食ふに困つた者が澤山ある。今日の中産階級と雖も饅頭のかげを取るのはいから、それより握飯を持つて行かうと云ふ者も幾らもある。貯蓄心がないと云ふのは斯の如

き原因から來るのであるけれども、其の他に於ては理想がないといふことは一大原因である。何等向上の途を得ないのである。中産階級であれば家を建てたいと云ふ考を有つて居つたり、圖書館を造りたいと云ふ考を有つて居つたり、子供を教育したいと云ふ考を有つて居つたり、某學校に這入りたいと思つて居るけれども、腦髓が低いと毛頭是等の考を起さない。即ち現代の文明的空氣を呼吸したいと云ふ考を有たない。人文主義を去ること甚だ遠いといふべきである。其様な方面に金を使ふと云ふことがないから皆浪費してしまふのである。

彼等が浪費するから、給料を少くすると云ふことは出來ない。彼等の爲に特別に貯蓄の方法を講じてやるといふことも宜くない。何故なれば、彼等と雖も一人前の人間である以上は、斯の如き方法を講じてやると云ふことは、却つて之を輕蔑する事になる。労働者として資本主と同等の位地に達したいと云つて居るからには、全然放任して自由意思に任すべきであるからである。

七 八時間制の研究

前述の如く、デモクラシーの思想に伴れて、社會の原動力が新しき労働者方面に向て進歩しつつある。第四階級は此點に於て、其の特色を發揮して以て社會に貢獻するこそ、眞に時代思想に

投じたる者といふべけれ。此際に當つて唯單に中産階級にのみ憧憬すると云ふ事は時勢の逆轉である。須らく労働を以て自任すべきである。労働者は云はなければならぬ。一切人は労働者の如く労働せねばならぬ。獨逸の状態を見よ。如何に勉勵するか。此猛烈なる勉勵をなすに非ざれば獨逸をして舊時に復することが出來ぬのである。日本は今や經濟に於ては亞米利加と大競争をしなければならぬ。大に勉強せねばならぬと。

斯く云ふと如何にも無情冷酷のやうであるけれども、さうではない。第一は職業に依て大小の差がある。百度以上の部屋に這入つて、石炭を焚いて居る人間の如きは、八時間以上の労働は出來ぬであらう。海軍の水夫の如き是である。更に他の商賣で言へば、鐵工業と紡績業とは非常な差がある。比較研究するに非ざれば一概に疲勞の程度を云々すると云ふことは出來ない。

世間に於ては八時間の聲が喧ましい。けれども、多くは夢中である。自分の見る所を以てすれば、労働者が八時間と制限されたならば、非常に迷惑であらうと思ふ。其の權利を侵害されたるが如き感あらうと思ふ。働けば働く丈多くの報酬を得ることの出來るのに、八時間と制限されて満足する者があるか。慾の皮のツツ張つて居る者に満足の出來る筈はない。八時間と制限するのは國民衛生の上からである。無理に己めさせるのである。けれども之れがため、自分で商賣をし

て居る者が八時間で己める必要が何處にある。學者が八時間限り勉強してならんと言へば學問は發達しない。商店の主人が八時間で己めるのは愚のことである。興味でやるには何時間繼續しやうが差支ない。

けれども斯の如きは隨意労働者に就て云ふべきものであつて、山間に造られたる會社に買はれて來て、逃げるには逃げられず強制的に十時間乃至十五六時間の労働をさせられて死ぬ迄追ひ使はれるが如き、不隨意労働者に對して云ふものではない。併し労働問題は隨意労働者に就て云ふよりも、寧ろ不隨意労働者に就て論じなければならぬ。憐れむべき不隨意労働者である。隨意労働者は八時間で歸られる。唯金に困るから必要上餘計やるのである。金さへあれば何時でも歸つてしまふことが出来るものである。故に隨意労働者と不隨意労働者の區別を立てることが最も必要である。

若し國民衛生の上から言ふならば、職業に依て種々なる差別あることは實驗的に研究を要する。本研究所は今や此研究をなすつゝある者である。此研究の結果が發表された後に非ざれば、八時間制度云々と云ふことは分らない。若し八時間制度が唯單に報酬問題から起つたものとするれば、それは構はぬ。報酬のことは別に研究を要するからである。

八 筋肉労働

イ 職業の種類

労働者は須らく労働者以て自ら任じなければならぬ。けれども、是は労働者たることを恥づべからずとなすのであつて、労働者を自慢にせよと云ふのではない。何故なれば筋肉労働は牛馬に近いものである。毫も人間の労働と云ふ價值がない。牛馬の労働と人間の労働との異なる所は那邊にあるかと云へば、人間の労働は知識の加はると云ふことに存在して居る。苟も人間の労働たる以上は、少しでも知識の加はらないと云ふものはない。如何なる労働と雖も筋肉労働でない者はない。唯筋肉労働の大小があるばかりである。肉體があつて精神がある。精神の働きも肉體の働きに依るのであつて、精神を勞するものも、矢張り筋肉労働でないものはないのである。況して人の爲に働くと云ふことであれば、多少なりとも肉筋を勞働せぬと云ふことはないのであらう。若し筋肉を勞働する方面から職業を別けて見たならば左の如きものがある。

一、力士。力士は遊戯をするものであるから、何等益のない者である。従て職業でないと言ふ者もあるけれども、力士は丁度俳優と同じものであつて、其の技術を人に見せるのである。其の

技術に依て人に美術心を満足せしむるのである。美術は遊戯であるけれども、矢張り一の職業である。力士は筋肉を勞するだけで品物は残らぬけれども、矢張り一種の技術として美的感覺に價するものである。而も讀んで字の如く力を勞する者であるから此位筋肉勞働の著しいものはないであらう。即ち筋肉の發達したことに誇つて居る。如何に筋肉が發達して居るからと云つても、牛馬ほどには發達して居らぬ。日本一の力士に大八車を挽かしても牛ほど力はない。牛馬の勞働と人間の勞働とはそれだけの差がある、單に筋肉の勞働ならば牛に劣つて居る。力士のやるのは技術であつて單に筋肉勞働のみではない。

二、柔道。柔道家も是亦筋肉を勞すること大なるものである。柔道は職業としては護身用になるものである。其上技術と云ふ意味をも含んで居る。且又力の運動と云ふ意味をも含んで居る。それで昔より武士のやるべき一種の技術に屬して居つた。角力も亦武士のやるべからざるものではないけれども、柔術よりも一步下つたものゝやうにも見られて居つた。自分には柔術と角力と何ちらが高尙なものであるか分らない。

三、體操。體操の教師も亦身體を勞すること甚しい。是は云ふ迄もないことであるけれども、體操の教師は教師として尊敬せられて居ると云ふのは、何であるかと云ふと腦髓に於て貯ふる所

が多いからである。即ち知識的に修養がなければなれないからである。力士は知識的に修養することが少ない。唯實地に練習しさへすれば宜いのである。そこに違ひが起るのではないかと思はれる。

四、配達運送業。配達運送の業に従事する者は、最も身體を勞すること甚しい。知識を勞すること極めて少ない。此故に前の柔道や體操のやうに重く視られない。何人にも出来る。若し出来ぬとすれば、牛馬を以て之に當てれば宜い。傳書鳩でも役に立つこともある。

五、軍人。軍人も亦筋肉勞働の大なるものであるけれども、知識を勞することが甚しいから、軍人として尊敬せられて居るのである。殊に軍人は忠義と云ふやうな道德に付て、深く心得る所がなければならぬから其意味があるのである。

六、農夫樵夫。是等も亦筋肉勞働の大なるものである。けれども之も矢張り知識を勞することが少ない點に於て、それほど高尙な位置を占めることが出来ないのである。若し精神を勞するところが甚しくなつて發達した農學家となり、農學に於ては日本第一であると云ふやうになると云ふと、非常に高尙な者になつて来る。樵夫でも矢張り同じことで、山林學に就て造詣すると云ふと非常に高尙な意味を有つて来るものである。

七、水夫。前同斷。

八、役者。是も筋肉労働の甚しいものであるが、人を現はすと云ふ所に於て技術の知識的なる所があるのである。己れを無にして以て美術の爲に盡すものとすれば、恐らく美術の方面に於ては理想的のものであらう。男が女の真似をすると云ふのは、男と云ふ性質を全然失くしてしまふのである。其間人格が變つてしまふのである。自己の人格を變らしむる所に於て、本人の妙があるのである。自身女になつてしまはなければならぬのである。即ち己れを殺して以て一の女を現はすと云ふ所に於て、役者の妙味がある。丁度畫家が畫に没頭してしまつて、自己を忘れてしまふやうなものである。

九、工匠。是又筋肉労働の大なるものであるけれども、脳髓を勞することが割合に少ない。之も矢張り農夫と共に非常な發達をなせば一種の學問となり、高尚なるものとなつてしまふ。

十、工場労働者。是も亦筋肉を勞するものであるけれども、知識を勞することも亦ある。

十一、居職。木版裁縫の如きものは是である。大に知識を勞すると否とがある。

十二、畫工。是は筋肉を勞することは少ないが、知識を勞することが多くなつて来る。

十三、美術家。前同斷。

十四、書家。擊劔の上手な人は字が巧い。書家は擊劔が出来て来ると、書が上手になる。即ち書の中には筋肉労働が現はれて居るからである。

十五、政治家・事務員。是は知識を勞するのは勿論であるが、全然筋肉の労働がない譯ではない。彼の多數の中で演説をしたり、又は多數の人に接近したり、夜晩く迄外に出て活動したりする筋肉労働は非常なものである。

十六、教育。前同斷。

十七、談者。前同斷。

十八、學者。此邊になると筋肉労働は少なくなつて、知識を勞することが多くなつて来る。

十九、宗教家。宗教家となると、精神労働が非常なもので筋肉の運動は極めて少ない。殊に仙人になると筋肉運動はないと云つても宜い。

二十、遊人。全然筋肉運動をせぬと云ふのは職業のない人間である。

以上述べた以外に於て尙ほ職業の種類もあるに違ひないが、どの道筋肉を勞することの大小があるだけである。

職業としては平等である。何れも社會に必要である。宛も大なる機械を構成する、各部分のや

うなものである。鉄もあれば車もある。レールもあれば、軸もある。其の値打が非常に違つて居る。僅か五銭か十銭の値の物もあれば、又三圓五圓の値のあるものもある。之が全部なければ一の大なる機關を成すことは出来ない。有機體を組織するに足りない。是に於てか各職業會社を維持する爲には、平等であると言はなければならぬ。それで唯其の職業に多く知識を勞すると、少く知識を勞するのとあるだけである。高尚と非高尚との別を付けければ其處にある。高尚な職業であると特別の人でなければ出来ない。知識の入らない職業は誰にでも出来る。此區別は當然存在するけれども、職業を輕蔑することは出来ない。輕蔑するは不合理である。其の職業に就くと云ふとは其の人の種々なる境遇から來たものであるから、一概に本人が悪いと云ふことは云へない。又本人が良いと云ふことも出来ない。職業の爲に人間をも輕蔑するやうになるのは大なる心得違である。

九 職業以外は常識を發達すべきのみ

職業と人格とは區別して考へなければならぬが、職業が低級であると云ふと人格も低級になり易い。是れは古來の社會的遺傳性であるとはいへ、又一面から見れば職業其者の性質から出て來

一る。妓夫にも高尚なる人物があるかも知れぬが先づ少ない。何んとなれば人を惡道に導くを以て能となすからである。醜業婦にも良妻賢母となれる者もあらう。けれ共先づ少ない。矢張り職業に影響される。一般の理論としては、職業と人格とを區別して考へなければならぬ。之を笑ふ者は正氣でない。眞面目でない。硝子磨きのスピノーザを例擧するには及ばない。

是に於てか人間の務むべき所の道は、唯一つあるのみである。即ち一職業に従事して居る以上は、其の職業の方面の向上發達を期することである。即ち其の知識を養ふことである。腕を琢くことである。職業として出来る限り、完全な域に到達せんことを期することは是れである。熟練と知識と兩方面から進まなければならぬ。マルクスの價值説には、唯單に勞働の分量に依つて品物の價值が異なると云ふことがあるけれども、是は大なる誤である。小學校の一年生が如何に熟練したからと云つても、矢張りそれだけの者に過ぎない。二年生三年生と段々進むに従つて高尚になつて來る。高尚なる品物が出来る譯である。役場の代書は非常に熟練して居るけれども、拙劣である。若し書家なれば同じ熟練であつて上手である。即ち分量は同じでも品物の程度が違ふ。分量のみを以て交換價值を定めることは出来ない。斯の如き譯であるから、知識と熟練と兩方面より進むことを考へて置かなければならない。其の方面で進むと云ふと、必ずや職業と生活と一

致することになる。職業に費す時間は一日八時間も十時間もある。其の間嫌々ながらやると云ふやうでは人間の生活は苦である。職業に興味を有つと其の反對である。それには其職業を支配するだけの考を有つて來なければならぬ。飛行機乗りが乗れるまでには夢中である。詰り其の熟練が自分の生活と一致して居るからである。乗れる様になると最早倦きが來る。何故なれば全力を傾注するだけの必要がないからである。全力を傾注すると云ふのは何であるかと云へば、生活を捧げるのである。自分の生活を捧げて居る所に興味を感じて居るのである。斯の如き状態になつて來なければ職業は總て苦である。若し其の職業に馴れても、更に發達しやうとすれば全力を傾注するやうになり、生活と職業とが一致することになつて來る。

斯く言ふと或は言ふであらう。工場労働者の如きに對して、それは出來得ないことであると。然れども吾人の見る處を以てすればさうでない。工場労働者は自ら進んでやると云ふ氣を初めから持つが宜い。是は心得やうである。其の様に心得れば出來ぬことはないのである、唯追ひ使はれるのであると思ふから出來ぬのである。自分の仕事が如何に他の仕事と關係するか。如何に社會と關係するか。此れ等をも考ふべきである。手の仕事が多量なりとも機械的になつた時には、向上心さへあれば頭の仕事が増加して來る。

更に他の方面から云ふと、職業以外に於ては常識を修養することが必要である。新聞を読み、雑誌を読み、講演會に出席し、更に餘裕があつたなら書物を読む。専門學的研究は毛頭必要はない。唯常識を養ひさへすれば宜いのである。官吏、政治家、議員の如きものは皆常識である。労働階級の勢力を世界に發揮せんとしても、其の常識を完うしてからでなければならぬ。市會議員や區會議員の如き常識さへあれば出來るのである。専門の學問をやる必要はない。縣會議員も國會議員も皆常識があれば出來る。學者であつても常識のない者もある。如此者は議會に出ることは出來ない。職人であつても常識のある者であれば、議會に出ることが出來る。それで常識の必要と云ふことが最も明かである。各人は其の職業の専門家である。専門の方面に於ては生活と一致せしめ、常識の方面に於ては天下國家に關係する。全體を理解する。相互に調和する。人文主義に近づく。之で最も満足なる状態になるべき者と思ふ。夜學校などに於て労働者の生徒は居眠りが多い。労働時間の多いことを示めず。モット少なくてよなどといふものもあるけれども、自分の考へを以てすれば此の如きは大なる間違である。職業のある者は、職業の爲めに生命を捧げるのが第一である。職業の向上發達を期するのは第一である。其の上に於ては新聞を読み、雑誌を読み、書物を読んで常識を發達せしむるのは、萬人共通のこととして奨励すべきであるが、職業以外の

學校に這入つて新しき職業を求めやうと云ふのは、其の道を二つにするものである。二兎を逐ふ者は一兎をも得ない。

筋肉労働の言たる。卑なるかな。浮なるかな。今頃になつて何でも知識の競争であるといふ丈馬鹿氣で居る。けれ共筋肉労働などいふ馬鹿々々しい聲があつて人を惑はすから己むを得ない。知識ある者が勝ち知識ない者が負ける。之でなければ社會の秩序の維持は立たない。ストライキに依て餘計の報酬を得ることを考へて居た日には、僥倖を求める人間の集合となつて来る。無賴漢の集合となつて来る。今日一部の實際状態である。此れは政府に責任がある譯でもなければ、教育者に責任がある譯でもない。資本家に責任があるのだ。資本家自身が利慾の動物で、社會の秩序全體などの觀念なく、只自己目前の利益を貪るのみであるからである。彼れ等は東北地方の言葉を以てすれば「ゼネ」の奴隷である。此様のものが多くの人間を集めるのだから、社會の秩序が破壊される。決して職工許り悪いのではない。

ストライキ、サボタージュを是認する政治學上の理論もないではない。階級闘争の時代には己むを得ぬこととして居る。寧ろ一の道具であるとして居る。けれども其の弊害は何處に見はれるかといふと、労働者自體の破滅である。小さくも満足な形をして居た魚が腐つて土になる。魚は

夜にして飛び上がり了ることもあるが、土は如何ともしやうがない。生氣のないものは如何爲やうもない。労働者をして自覺せしめんとするならば、彼れ等をして生意あらしめねばならぬ。彼れ等をして魚たらしめねばならぬ。彼等をして龍たるの機會あらしめねばならぬ。即ち知識を練磨すると同時に、大に知識の修養に努むべきである。若し知識を練磨することを以て必要とせず。單に筋肉労働を自慢にするものであつたならば、人間でない方が宜いと云ふことになつて来る。筋肉労働の如きものは自慢にも何もなつた話でない。若し徹頭徹尾筋肉労働を自慢しやうとするならば、國際労働會議には日本に於て最も強健なる牛を出した方が宜い。

第四章 個人的生活の内容

一 國際主權

イ 國家以上の主權

國際聯盟 (League of nations) は世界の人の一様に夢想し、又一部分は實行せられたるものであつた。其の當初は單に國家の同盟に止まらずして、實に社會の結合なりと思はれて居た。即ち

League of states-league of nations なり。更ニ League of societies 若くは Society of nations とするべきものとせられて居つた。然れ共今日の國際聯盟は矢張り單なる國家同盟である。其國際聯盟に就ても種々なる案が、種々なる方面より立てられて居つた。國際聯盟が果して國家以上の主權即ち超國家的主權を有するものなるや否やに就ては種々の意見がある。或は單に條約に外ならずと言ふ者もある。又は超國家的權力の發生であると言ふ者もある。新聞紙に據れば、樞密院に於ても二個の疑問を以て、之れを外務省に問ひ合したと云ふことである。

- 一、國際聯盟は一種の偉大なる國家的機力、即ち超國家的權力を有するものの如し。
- 二、國際聯盟が果して超國家なれば、聯盟の權力は帝國憲法の規定せる大權と牴觸せるに非ずや。

と云ふことは是れである。而して外務省は大略左の通りの意見であると云ふ事である。けれども此は時事新報紙上で見たので、外務省の責任ある發表に據つたものではないから、之を以て外務省を彼此言ふことは出来ぬ。けれども世界には之れと同様の意見を懷いて居るものが多いから此に掲載する。

單り國際聯盟のみならず。從來のあらゆる條約及協約は何れも多少統治國の主權に束縛を加

ふるものなり。然れ共國際聯盟を包含する對獨條約を批准するは聯盟規約が主權を束縛するに非ずして、聯盟以前に存在せる大權を以て聯盟規約の効力を與へんとする者なり。從て聯盟規約は從來の條約協約と同様何等帝國憲法と牴觸せず。

と。斯く解釋して居るものであるけれども、樞密院側に於ても又更に一步を進めて言つて居ると云ふことである。

外務省側の右の説明は、畢竟國家主權は聯盟以前に存在すと云ふにあり。此の日時の問題は暫く之れを論ぜずとして、抑も國際聯盟は人格者なりとすれば、其多數の國家を包含する點より見て、國家以上の大人格者なりと言はざる可からず。是れに由りて見れば國際聯盟は、依然超國家なりと言はざる可からず。

と。此問題は非常に興味ある問題である。今吾人の見るところを以てするに、總ての條約協約は其の條約協約當事國家以上に於て、一個の權力を成立せしめた者と言はなければならぬ。之れを個人に就て見るに、二人が約束すれば其の結果は一個人の意志ではない。一人の意志に比すれば二倍の力を有つて居る譯である、一個人は之れを破ぶることは出来ない。二人であるからよく分らないのであるが、之れを三人四人五人六人となつたと假定せよ。それ等の間に成立したる約束

は、即ちそれ等各一人を超過したる一個の意志でなければならぬ。此意志は各當事者を束縛することも出来る。例へば此の約束に背いたる者は、如何なる罰を蒙らしむると云ふが如き之れである。亦衆寡敵せず。嚴重に其の罰を實行することも出来る。約束は五六人の共通意志であるから超個人的の意志が成立したものと云はなければならぬ。更に多く之を擴げて見れば、百人二百人乃至は萬人十萬人といふやうになるといふと最も明瞭である。それ等の人々が約束して一個の規約を結び、其の規約に従はざる者は罰せられると云ふ時には、即ち一個の超個人的の意思があると云ふことは極めて明瞭になつて来る。所謂法律の如きも之である。意思が有る無いと云ふものは何に依て定めるか。即ち意味に依て之を定めるより外はないのである。五人六人の集會に於て誰が罰するかと云ふと、規則が罰するのである。規則は何かと云ふと集合意志である。其集合意志を取り扱ふものは誰かと云ふと、矢張之を代表するものがなければならぬのは素よりである。今國家間の關係に付ても之と同じことがある。二國が條約を結ぶ時には其の條約は既に國家以上の意志である。唯其の場合に於ては自國が勝手に約束したので、勝手に背けると思つて居る丈のことである。事實背ける事はあるであらう。けれども條約を結んだ時が既に自繩自縛である。自分を支配する共通意志を作つて了つたのである。三國以上約束すれば更に強固なる意志を作つたのである。況して多數國家が協同して、或る事件を決し得るが如き約束あるに至つては益々重大なる共通意志を作つたものと言はねばならぬ。

□ 國際聯盟の意志

今國際聯盟の如きは此最後のものであつて、超國家的意志と云はなければならぬ。今之を規約に付て考へて見るに、國際聯盟は所謂國際聯盟協會及び實行委員の如きは、國際聯盟其者の意志を實行する所の機關である。國際聯盟附屬第二條第六節にある。

ザール河流域ノ地方ノ施政ハ國際聯盟ヲ代表スル委員會ニ之ヲ委任スベシ。

とあるが如き、委員會は國際聯盟を代表して居るのである。而して其委員會がザール地方に政治を施して居るのである。ザール地方が各國の共有地であることは素よりであるけれども、共有と云ふことが既に國家以上の意志を示めして居るものである。又破約制裁なるものがある。第十六條に

加入各國ノ位地ニシテ若シ第十二條第十三條或ハ第十五條ノ規約ヲ無視シテ交戦ノ舉ニ出ツル時ハ、之ヲ以テ聯盟加入ノ各國ニ對シテ戦争行爲ニ出テタルモノト宣言ス、其國ニ對シテ直ニ通商財政上總テノ關係ヲ絶チ、聯盟加入各國民トノ間ニ有スル交渉ヲ禁ス、聯盟加入ト

否トニ拘ラス他ノ國民トノ財政狀況或ハ個人關係ヲ悉ク包括スルノ法ヲ講ス、斯ノ如キ場合ニ對シ聯盟ノ規約保護ニ用ユヘキ兵力ニ對シ、關係諸政府ハ有力ナル陸軍、又ハ海軍ヲ如何ニ分擔提供スヘキカヲ按排計畫スルハ實行委員ノ義務ナリトス。

と。即ち事實に於て國際聯盟は、此制裁を加ふるだけの意志があるのである。して見れば國際聯盟を以て、超國家的の主權であとするのは疑ふべからざることである。又第十九條に

聯盟會議ハ聯盟加入國ニ對シテ、其ノ適用不能トナル條約ヲ改訂シテ之ヲ繼續セシムレハ、

世界平和ニ危懼ヲ生スヘシ、其他ノ國際狀態ニ付テ考慮スヘク常ニ注告スル所アルヘシ。

とあるが此注告と云ふことも、明かに國際聯盟が各國に對して行ふ所のものである。國際聯盟其者として一個の意志ありと云ふとは否定出來ない。又第八條に

加入各國ハ平和維持ノ爲ニ國家ノ安全ニ適應スヘキ程度ニ於テ國防ヲ最小限度ニ縮少シ共同行爲ニ依ル國際上ノ義務遂行ヲ強制スヘキエウアルヲ望ム。

とあるが如きも、國際聯盟が最少限度に軍備を縮少することを要望するものである。是亦國際聯盟其者としての意志があるに非ざれば出來得ざることである。是等に付て一々今説明する必要はない。二國に超越したる一個の集合意志があると云ふことが

分れば、國際聯盟の國家主權であると云ふことは又明瞭に分つて來ることである。各國家の意見が一致し、且つ共同に之を遂行するの意思あるに至る時は其點に於て既に超國家的意志が成立したるものと言はなければならぬ。而して國家は其意志に隨つて實行して居るのであるから、其の意志の國家に對する拘束力は之を否定することは出來ない。若し之に拘束せられるのが嫌だとすれば、國際聯盟を脱する外ないのである。國際聯盟に加入して居る以上は矢張り其強制意志の下に立つものと見なければならぬ。國際聯盟規約の總論を讀んで見れば明かに分る。

國際間ノ紛議ハ之ヲ干戈ニ訴ヘテ解決セントセサルヘシトノ義務ヲ承認シ、各國民間ノ公明正大ニシテ名譽アル關係ヲ規定シ、各國政府ノ行爲ニ對スル實際上ノ規則トシテ國際法上ノ協定ヲ確立シ、聯盟各國間ノ總テノ條約義務ニ關シ、正義ト嚴正ナル主張トヲ保持シ以テ國際間相互ノ緊張ヲ緊密ニシ、且ツ國際間ノ平和ト安全トヲ確保センガ爲ニ聯盟各國ハ國際聯盟ノ規約ニ同意ス。

とある。此精神を以て國際聯盟は作られたものである。而も此精神は各國の漸くにして纔かに一致したる處である。少く共纔かに一致したる所のものと言はなければならぬ。或る國は徹頭徹尾軍國主義を撤廢しないと思つて居つたであらう。他國の利益などは考へないで居つたものもあら

う。不正不義を實行してまでも自國の利益を圖りたいと考へて居つたものもあらう。けれども、國際聯盟は斯の如き精神ではない。正義人道を標榜して居るものである。平和を標榜して居るものである。それだけの點に於ても一個の主義主張を有つて居るのである。此主義主張の下に各規約は作られて居るのである。して見れば各國皆此精神に同意したものと云はなければならぬ。國際聯盟が一個の人格者である。一個の意志を有つて居ると云ふことは更に疑ふの餘地がない。

二 民族 自決

今回の戦争に依て何が最も能く分つて來たかと云ふと、世界結合の最も鞏固なる單位は民族と云ふことである。民族自決の聲が之を示して居る。民族の異なるものは同化し難い。澳太利、洪牙利の分裂露西亞の土崩の如き、何れも人種關係を以て基礎として居る。即ち民族と云ふ團體が最も鞏固なる結合をなすつゝあるのである。

將來人種的混合の行はれることはあるまい。人種の差が少なければ結婚も行はれるけれども、甚しいと云ふと容易に行はれ難い。オードが結婚に關する一種の規則を立てたことがある。人種の差の少なき時に於ては結婚が喜んで行はれるけれども、其の場合に於ても常に優良人種に可つ

てせんとすると。従つて人種の混合も容易に行はれない。實際上に於ての不便に基因するのであらうけれども、又一には人種と云ふ觀念に淵源して居る。勿論澳太利の如きは數多の人種より成つて居るから、其の間に結婚が随分自由に行はれて居るけれども、之とても矢張り人種關係に依て國家が分裂する位のもので、先づ一般に人種の混合は困難と見て宜い。少くとも今日の所に於ては大なる障壁を築いて居る。故に民族自決は今日の所最も根本的の現象と見て宜いのである。之に就ては予は「社會及國體研究録」第五號の附録に國家及國體の將來として論究する所があつたから、今茲には之を述べない。

併合民族は何れの國家に於ても非常な問題である。民族自決の聲ある以上、民族が獨立したがるのは素よりである。然らば同化が出来るか。同化にも狹義と廣義とある。一民族を狹義に於て同化せんとすと云ふには、先づ其の言語から變へなければならぬ。けれども斯の如き狹義に於ける同化が果して宜いかどうか疑はしい。若し民族自決と云ふことが世界の人情であるとすれば、狹義に於ける同化を施するは極めて愚策である。民族を尊重するのは道德心理的問題である。國家の問題としては權力である。唯權力が伸張すれば、それにて其目的を達したるものと見て宜いのである。國家と社會とは此點に於て矛盾を示めして居る。國家は權力的に他の民族を併合し

でも、民族の社會的方面は言ふことを聴かない。乃ち民族併合して一大社會をなすといふことはない。故に國家の併合と民族の社會的融合とは全然別問題であると同時に、民族が一大單位として活動し民族間に於ける労働者の同盟の如きは、一時的方便的方法に外ならないといふことを忘れてはならぬ。

三 各種の生活

今日の所吾人の社會的生活は、單に國民の範圍内に制限せられない。今大體より之を區別すれば左の如く四種ある。

- 一、民族的生活
- 二、國家的生活
- 三、世界的生活
- 四、國際主權的生活

之である。其中に就て民族的生活と云ふのは、同文同種なる民族の生活を指すものである。前章述べしが如く、民族は最も鞏固なる國家である。其の生活は深く人間の精神に根柢して居る、國

國家的生活は如何と云ふに一の國家は數個の民族から成立して居る。國家の人としての行動は國家の法律命令に服従すると云ふ意味に於ての生活である。換言すれば國家の會員としての生活である、世界的生活は即ち世界共通なる思想の上に生活するものである。其中にはデモクラシーもあり、労働問題もあり、一般の社會問題もある。乃至は文明の空氣がある。相互様式もある。是等の種々なる方面が世界的共通である所から見ると云ふと、個人の社會的生活の大部分は、實に世界的になつて居るものと云はなければならぬ。換言すれば個人は世界の空氣を呼吸して居るのであつて、此傾向は日一日と盛になりつゝあるのである。

次に國際的主權生活は國際聯盟の精神に従つて生活して、其規定に束縛せらるゝ意味に於ける生活である。個人は國家の人民である。國家が國際聯盟の會員であるのである。直接に國際聯盟の影響を蒙らざる如くであるけれども、事實に於てはさうではない。即ち國際聯盟は直接に個人と交渉はしないけれども、國際聯盟の精神其者は直接に個人に影響しつゝあるのである。正義人道を標榜するが如き、或は國際的平和を標榜するが如き一として然らざるはない。

此四方面の生活に就て將來最も重きをなす所のは、即ち明かに世界的生活である。國際的生活の如きは、比較的個人生活の僅少なる部分を包含するものになつて来る。國家的生活が一部

分を占有するとしても形式的のものであつて、事實は國家共に共通なる法律制度となつてしまふ。國際主權的生活の如きものも亦、個人生活の要素となつては居るけれども、世界的生活が遙かに重大なる部分を占めるが如きでないことは明かである。そのみならず世界的生活と國際的生活とは、往々にして相重複する所があるのである。世界の思想が次第に相統一して來ると云ふと、次に來る所の問題は何かと云ふに、民族的生活は深く人心に根柢して居るものであるから容易に滅却することが出来ない。世界的生活が各個人に大なる幸福を持來すと同時に、民族生活は又大なる幸福を齎らすものである。否直接幸福は民族的生活に於て到來するのである。吾人は此點に於て深く考慮する所がなければならぬ。而して民族的生活が良いか悪いかと云ふことは、一に其民族發展に關係するものである。且又世界に貢獻する所の如何に關係して來る。世界に貢獻する處が多ければ多いほど其民族は益々有望である。世界に貢獻する處がなければ、其民族は自滅に傾くより外ないので、吾人が東洋主義を唱へるのも此點に由來するのである。

四 國家主義と個人主義

民族は重大なる社會的團結である。然るに一面に於て國家と個人とは衝突するが如き觀を呈し

て居る。露西亞のレーニン、トロツキーの如きは、今度の戰爭を以て資本主の爲にするものとして居る。而して國家は資本主を援けるものとして居る。此説は世界何れの國と雖も、聽かざるはないと云ふ状態になつて來た。戰爭は主として労働者の手に依て行はれた。聯合軍が勝利を得たからと云つても労働者の手に依て勝利を得た譯である。それだから労働者は權利を取得しなければならぬと云ふ様になり來つた。果して然りとすれば、國家と労働者と云ふものは、全然兩極端に分れて居るものである。労働者の意思と國家の意思との如く相異なるものであるか。之れに付ては大なる疑がある。成程專制君主が居つて自己の領土慾を満足するが爲に、國民の困難を顧みないで戰爭したものとすれば、是れ即ち君主の戰爭であつて人民の戰爭でないことと云ふことが出来る。或は又資本主が商業を擴張する爲に、外國と戰爭をすることに賛成したとすれば、矢張り是は資本主の戰爭であると云ふことも出来る。戰爭の爲に利益を蒙むる階級があるとすれば、其階級は戰爭を主張するに違ひないけれども、是は一定の標準とするとは出来ない。何が故に資本主の戰爭であつて労働者の戰爭でないことと云ふことが出来るか。若し外國が侵略し來つたならば之に應ずるには如何にすれば可なるか。必ずや兵火の間に相見えざるを得ないのである。此際に於ける戰爭は労働者の戰爭であると云ふことは出来ない。又は或る一國が其富を増殖するが爲に戰爭

したと假定する。其の結果は多くの人民の上に非常なる苦痛を蒙らしめる。けれども、此場合とて、我國が強くなりさへすれば、それだけ各人が幸福を受けることになる。それで國の強いと云ふことは、同時に個人の幸福になつて来る。其點を考へると云ふと労働者の意思と國家の意思とが衝突すると云ふことはない筈である。否寧ろ國家の意思は労働者の意思のみならず、一般人民の意思を代表して居るものと云はなければならぬ。戦争の爲に一部の人間が利益を得ると云ふことは先づ已むを得ないこと、云はなければならぬ。

要するに國家の意思は、決して資本主の意思だけを代表する者ではない。又労働者の意思だけを代表する者でもない。一般人民の意思をも代表しつゝあるものである。人民の困るのを見ながら戦争すると云ふことは、萬が一にもない筈である。已むを得ずしてやるのである。戦争が始まれば宜いと希望して居る者もないと云ふことはない。之に依て莫大の利益を得ることが出来るけれども、斯の如きものは矢張り例外である。國家は斯の如きものを利益するが爲に戦争をするのではない。日本の人民は年々増加して行くが、如何に之を處置して宜いかと云ふと、即ち領土の必要がある。移民が必要である。是に於てか國家の爲す所は即ち政治家のなす所であつて、政治のなす所のもは、國家其者の利益を考へることになると云ふことは素より云ふ迄もないことである。

資本主の戦争だと云ふ意味は勿論あるには相違ないけれども、戦争の爲に労働者が非常に利益を得ると云ふこともある。利益の上からだけ論ずると云ふと、一般が好いのである。又労働者の爲に勝利を得たと云ふことは甚だ疑はしい。如何に労働者がやつて居つたからと云つても、策略が宜しきを得なかつたならば失敗に終ることは勿論である。努力と策略と何れが必要であると云ふことは、考へずして明かなことである。何等精神修養のない所の將校をして、三軍を指揮せしむれば悉く之を殺してしまふ。労働者の爲に勝利を得るなど云ふことは、殆ど愚にも付かないことである。國家全體の協力に依て始めて勝利が得られたのである。労働者に依て勝利が得られたと云ふのは丁度機械は土臺がある。土臺が即ち機械を動かして居るのである。土臺がなければ機械は動かないから、土臺を以て第一の必要物とせなければならぬといふ様なものだ。其の愚なるは労働者にも分るであらう。全體が必要である。全體がなければ其の結果は生じて來ない。戦争にしても之れと同じく、獨り労働者のため許ではない。全體の結合から起つて來るのである。

第五章 改造の一二問題

一 教育

教育は須く世界的思想の立脚地より教授すべきである。世界の知識を注入することが必要である。單り知識ばかりではない。世界的感情を養成することが必要である。此感情を養成するにはどうするかと云ふと、外國の人と接近させることである。亦言ひ聞かせることも必要である。外國の美點も之を知らせる必要がある。同時に缺點をも之を知らせなければならぬ。外國に對して極めて公平なる眼を以て見るやうにしなければならぬ。之と同時に自國をも亦公平なる眼を以て見るやうにしなければならぬ。飽く迄も世界的立脚地に立つて廣々したる氣分を養成することが宜いであらう。歴史や地理に於て、餘り自分のことばかり賞め過ぎるのは面白くない。了見が狭くなつてしまふ。

教育者たるものは自國を賞めさへすれば、それで試験に及第するやうでは宜しくない。自國の缺點を擧げて得々たるのは素より宜くない。けれども之を知らなければならぬ。又教育者たるも

のは、必ず外國に關する知識を大に得て來なければならぬ。外國語の必要がある。漢文の如きものは不必要である。それだけの精力を外國語に注ぐが宜い。學校に於ても亦外國に關する資料は最も外く之を集めなければならぬ。さうかと云つて自國を忘却すると云ふことは全然出來ない。即ち民族自決の聲の盛んであると云ふことは、愛國心の盛んであると云ふことを示すものであるから、是亦一旦緩急あれば國家に盡すのが本體であると云ふことを知らせなければならぬ。

二 儒教

儒教は今日に於ては、殆んど床の間の飾物に過ぎない。唯古來の教として珍重するだけのことである。人間の生命を支配するだけの權威はない。論語の中に書いてあることは、教訓となることがないではないけれども、何れも唯中學校の教授細目のやうなものであつて、特に今日の人の筋脈に觸れると云ふことはない。今日の人は深い説明が出來ないと満足しない。例へば何故に親に孝行を盡すかと云ふことにしても、唯單に人間はさう出來て居ると云ふやうなことだけでは面白くない。論語の中には此種の説明がない。吾人を以て之を觀るに親に孝を盡すと云ふのは、即ち人間本來の傾向であるのである。何となれば人間は生物と同じく子孫を繁殖するを以て一の目

的として居る。此目的ある以上は必ず子孫を繁殖する。子孫を繁殖すれば安心して死ぬことが出来る。親子の間は身體は分れて居るけれども、矢張り一體である。一體が分れたるものに他ならない。植物の種が落ちて木となるのも同じことである。此點から見れば親は子を求め、子は親を求むると云ふのは、自分の肉體の一部分を求むるに他ならないのである。自然の傾向である。斯の様に説明をすると云ふと、親孝行と云ふことも自然に解つて来る譯である。説明のしやうは他にも幾らもあると思ふ。或は「己に如かざる者を友とすること勿れ」と云ふことにしても、理窟の上から云へば甚だ可笑しい。けれども人間は向上發展を希望するものであるから、此向上發展と云ふ自然の慾望を満足させるには、是非共己より長じたる者と交はらなければならぬ。否寧ろ之と交はることに依て、始めて自己の本能を満足することが出来るのである。斯くして己に如かざる者を友とすること勿れと云ふ説明が付いて来る譯である。此の様な説明をするのが學問の目的であつて、唯善をなせ悪はするなと云ふだけでは何等の價值もない。論語は聖人の説いたものであるから尊いものであり、且又其金言玉句は後世の人をして起たしむるものもあるには違ひないけれども、先づ大體に於ては床の間の飾物に過ぎない。之を扱ふ者は骨董品を扱ふ程度のものである。今の時に方つて儒教を鼓吹しやうなど云ふことは、甚だ以て其意を得ないこと、

云はなければならぬ。儒教が生命を有つて居ると云ふのは何處にあるかと云ふと、即ち二つある。一は一貫の思想である。即ち何等か腹の中に一個の根本主義を得なければならぬと云ふことが是である。之に付ては宗の儒者が、天と云ひ道と云つた言葉が大に参考になる。單に歴史的價值ばかりではない。眞の價值があるけれども、之に付ては今言はない（漢學の革命参照）。一は易である。易の占が當るか當らないかは今云ふ所ではない。けれども人間は皆疑を決せんとする要求を有つて居る。そこで此要求に應ずる爲に、此易を有つて居る儒教は人間の處世上、道德上の教である。處世上、道德上の原理を盡しそれでも分らない時は、占筮と云ふ一種の方法に依るのである。故に易は根本原理を明かにして、已むを得ざる場合に筮竹に依ると云ふ態度である。即ち易は儒教をして今日迄生命あらしむる唯一の方法であらうと思ふ。

三 神 道

神道は日本固有の道德習慣であるとして見れば、日本人に取つて離るべからざるものであるから、之を鼓吹し發展せしむるのは當然のことである。否寧ろ之を發展することに依て日本民族の氣魄を大ならしめ、世界生存競争場裡に立つの資格を養成することが出来る所以となる。此意味

に於て吾人は神道に大賛成なるものである。然れども神道の中には改良すべき所が少なくない。今其部分を擧げて見ると云ふと左の如きものがある。

一 神道は一切の教義を包含するやうに、説明せられなければならない。即ち日本人固有の道徳習慣であるとしても、道徳習慣が時代と共に變遷することを免れない。時代と共に變遷する意味に於て神道を許すのである。變遷するものは純然神道の面影が失くなつてしまふかと云ふに、勿論其様な場合もあるに違ひない。けれども長所特徴であるとすれば、何處かに残つて居る。之を發揮することが必要である。例へば人道主義の如き、義侠的精神の如き是である。我日本に於ては残酷なる行爲と云ふものがない。殊に外國人に對しては残酷なることをしたと云ふ例は殆んどない。それであるから日本に於ては、特に人道主義を唱へる必要はなかつたのである。けれども日本人は此人道主義を大に發揮することを考へなかつた。之を發揮すれば則ち、日本人の面目が世界に現はれる事になる。朝鮮に行つて居る者が朝鮮人に對して人道を行つてやれば、朝鮮人も亦我になづいて来る。又滿洲に行つて居る者が、滿洲人に對して人道主義を施してやれば、滿洲人は我日本になづいて来る。其他何れの國と雖も、人道主義になづかぬ者はない。けれども、唯日本人は心の中には思ふが口には出さない。之が抑も拙なる所である。世界に正義人道を唱へ

堂々たる世界的立脚地に立つて、之が現はれるやうにすべきである。田舎の間人は心に悪氣はなけれども、行に表はすことを知らない。何となく下卑て居る。且又小さい。都の人はそれほど心にはなくても、他に表はし方が旨いから餘程大きいやうに見える。今日本の人道主義の發達の必要も亦、左様なことがあるのである。此意味に於て神道が改造せられたならば、必ずや日本の潮流はアングロサクソン人に對抗することが出来るやうになるであらうと思ふ。世界文明は日本を缺いてはならないと云ふことになるであらう。

二 神社は須らく紀念館の類とすべきものである。神を祀ると云ふことは神を忘れないと云ふのであるから、即ち神を記念すると云ふことになるのである。神に祈つて幸福を求めると云ふことは、宗教上のことであるから人に勧めることは出来ない。記念すればそれで宜いのである。神社は須らく其の祭神に關する事柄を蒐集し、此處に參詣する人をして是等の物を見て、以て神のやうな人格になりたいと云ふ考を起さしめなければならぬ。又祀られる所の人の人格は優秀なる所の人であるに違ひない。神の前に物を捧げると云ふことは、祀る在ますが如くと云ふ古來の習慣に基いて居るものであるけれども、人に依て出来ないものもある。之を以て虚偽となす者もあるに違ひない。御神體と云つて見た處で實際は何も無いのもあり、或は又從來非常な立派なもの

があると思つて居つた處が、案外惡戯小僧があつて草鞋か其他の物を交換して居いたこともあ
る。だから一概に神社を以て神のある場所とすることは出來ない。神の場所とすれば迷信になる
又御神體を拜むと云ふことも之も考物である。唯御神體を假りに定めたのでは面白くない。其神
が着けて居られた着物であるとか、持つて居られた品物であるとか云ふものを、記念として置く
と云ふことであれば差支ない。其記念は其神を懷ふ所の符號となるから、其意味に於て之を尊ぶ
のである。神があるとして祀ると云ふことは習慣上の話であつて、出來る人はやるが宜いけれど
も之から後の人には段々さう云ふ事は出來なくなる。其の代り神社は記念館として置けば此位適
當な事はない。記念館ならば誰が行つても崇敬の念を起すに違ひない。

三 神道は餘程廣義に之を解釋して耶蘇教なり、佛教なり、其他儒教なり、西洋の教義なり悉
く之を包含するやうに説明が出來なければならぬ。けれども之に付ては「神道學建設の必要」
と云ふ論文の中に述べて置いたから茲には述べない。志ある人は之を參考せられむことを希望す
る。

斯くして神道も世界的立脚地に立つものとして、之と同時に日本民族に固有なる教義として改
造せられ、而も日本人の熱心に世界に向て鼓吹するに足る所の教義となることが出来る。

四 佛 教

佛教は日本の宗教として最も大なるものであるけれども、是又種々なる點に於て今日の思想に
合はない。今之を改良せんとすれば、

一 先づ第一に佛教は其熟字マニニカニヤムを改めなければならぬ。佛教學者の用ひて居る熟字は今日の時
代に適合しない。今日の新熟字に合せて使はなければ誰れも相手にしない。新熟字となれば如何
なる範圍の人も使ふ。佛教の熟字は如何なる範圍の人も使ふといふ譯にいかぬ。或は言ふであら
う。範圍は分らぬ事である。佛教者の間の範圍の方が廣いものであるといへると。然れども佛教
徒自身髪を貯へる。洋服を着る。肉食妻帯する。即ち世間普通を希望して居る。世間普通といふ
ことがあるのである。佛教は密閉したる教である。佛教の内部に於て種々なる熟字を使つて居る
と云ふことは宜いだらうけれども、世界一般に對して分るやうに用ひなければ誰にも讀めない。

二 佛教の範圍内に這入ると云ふと、寺には面倒な格式があり、僧侶の階級も澤山ある。階級
主義は佛教の特色であるが故に、如何なる俊才と雖も一度び佛教界に首を突込んでしまふと云ふ
と、其の社會の内に於て相ひ争ふを事とし、大なる宇宙を忘れる。之を他の傍觀者より見れば、

眼を轉じて廣く世間を見たならば、随分大なる活動をなすことも出来るだらうと思はれる。實際佛敎界に這入つて小ぜり合をして居る者が少なくない。餘り梯子段が多過ぎる者であるから俊才も其梯子段に眩惑せられて全精力を其處に傾注してしまふのである。

三 佛敎は戒律の嚴重なるものがあるから、一面に於ては此方面を何處迄も實行するやうにして世間を啓くことが必要である。即ち社會に對する刺戟劑となつて欲しい。純粹のアルコホールは猛烈である。猛烈な藥を使用することに依りて、身體は殺されもするし亦生かされもする。今社會に於ても之と同じく佛敎の猛烈なる刺戟に依て、或は發展もし又滅亡もするのである。それで今日の佛敎の如く唯俗化するのみでは面白くない。

第六章 結 論

人間に不平等のあることは顯著なる事實である。從て社會にも亦階級の起り來ることも疑ふべからざることである。労働者が資本主の階級と争ひ、資本主の階級を打破することが出来るにしても、其次に明かなるは労働者自身の中に矢張り階級が起つて來るのである。即ち富豪の階級と

貧民階級とが之である。更に又戰爭をして富豪を倒した處で、再び又貧者の中から富豪を生じて更に戰爭と成り來る。人間に區別のある以上は、貧富の懸隔が起り來らないと云ふことは出來得ないことである。單り貧富の懸隔のみならず、支配者の階級と支配せらるゝ階級との區別の起るのも、亦已むを得ないことである。今日に於ては資本主の階級と労働者の階級との戰を以て、社會當面の問題となしつゝあるのである。けれども階級戰爭は將來到底止むことはない。社會改造の理想は決して現在の資本主を打破することにあるのではない。さうかと云つて勞資を協調すると云ふところにあるのではない。唯單に人間をして其處を得せしむることにあるのである。即ち労働者も須らく大人物たるべしである。此様の設備をするのが、即ち現在社會の目的でなければならぬ。即ち人文主義が現在社會の目的である。

二

今日中産階級は最も不幸なる状態に陥つて居る。彼等は生活の壓迫に堪へ兼ねて居る。さうかと云つて自ら奮つて、中産階級の權利を伸長することをもしない。而して労働者の方面を見れば、無暗に横暴を逞ましくせんとして居る。將來労働者は横暴を逞ましくせんとするに拘はらず、何等修養を積むことがないから益々墮落して泥土の如くになつてしまふ。而して其中に於て

所謂富豪階級とか、又は識者階級とか、彼等の上に立つやうになつて來るのである。さうなると云ふと中産階級と云ふものは何等意味のない、所謂意氣地なしの階級となつてしまふ。此中産階級が意氣地なしの階級となつてしまふと云ふことは、我日本の國體を維持する上に於て非常に不得策である。彼れ等が單なる消極的のものとなつてしまふといふことは、誠に國家の不幸である。丁度士族と云ふ階級が明治の初期に於ては、何等の意味のないものになつてしまつたと同様なものである。將來、若し中産階級が何等意味のないものになつてしまふと云ふと、日本の國家は頗る危険なる状態に陥ることである。即ち伊伊利の如き状態になりはしないかと思はれる。伊太利は今日に至る迄帝制である。而も伊太利社會に於ては労働者の數が極めて多い。否寧ろ貧民のみであると云つても宜い位である。それが爲に伊太利が一度失敗すれば勿ちにして過激派化せぬと居るのも、全く此社會状態に淵源するのである。我國に於ても之と同じものがなければ宜いと思ふ。即ち中産階級の滅却は同時に労働者の増加を意味して居るのである。労働者の増加は、同時に貧富の懸隔の甚しくなることを意味して居るのである。即ち頭と足ばかりであつて、胴のない人間になつてしまふと云ふことの意味であつて、危険此上もないと言はなければならぬ。されば

我國に於ては是非共中産階級の伸張を圖らなければならぬと云ふことは最も明瞭なる問題である。然らば如何にすれば中産階級が伸張せらるゝかと云ふに、即ち人文主義を徹底せしむることである。(拙著國體と中産階級参考)彼の労働者主義の如きは偏頗であつて宜しくない。矢張り一切の人民をして其處を得せしむと云ふ方針に進まなければならぬ。殊に今日に於て貧富の懸隔の甚しくなるの一端を窺ひ知るべきものは、労働賃銀の増加と云ふことが是である。大工にせよ、植木屋にせよ今日位人夫の缺乏して居ることはない。又如何なる方面に於ても労働者の缺乏と云ふものは誠に甚しいものがある。是は何を示すかと云ふに、即ち社會が二方面に分れんとすることを示して居るのである。即ち一方の人間は、何處迄も人の上に立つて樂をして生活せんとする者で、此れが増加して來たのである。又他の一方面に於ては人に使はれて以て利益を得んとする者であつて此れが問題である。而も賃銀の高位がために次第に増加せんとしつゝあるのである。此れ等二方面の發達を示めして居るのである。而も人を使ふ方の人間の數は割合に少なく、使はれる人間の數は割合に多い。是に於てか貧富の懸隔の起り來りつゝあることは、労働者の缺乏に依て最も能く之を見ることが出来る譯である。即ち吾々將來の日本が現在の労働者階級をして益々墮落せしむることに依り、更に一方面に於ては人を使はんとする所謂富者階級の増加の爲に、労働者の

手不足を感じ労働賃銀を増加して以て遂に貧富の懸隔を甚しからしめ、而して中産階級を消滅に近付かしめんとしつゝあること、是は實に憂慮に堪へぬ所である。今日の社會根本の方針は決して階級闘争にあるのではない。階級闘争は唯一の目的とすべき性質のものではなくして、唯各人をして平等に文明の利得に與からしめ、平等に進歩せしめんとする一種の動的活動の方面に理想は置かるべきである。

三

斯の如く動的の理想である。此理想を理解することに依て中産階級は徹頭徹尾現代の文明を呼吸し、最も完全なる人格たるに近づくことが出来る。労働者階級も亦之を呼吸して之を以て完全なる人間に近づくことが出来る。而して労働者の新勢力に對抗して中産階級も、亦其の方面に於て八時間以上の労働をせねばならぬ。社會は労働化の時勢を通じ、其の勢力を利用したる一進歩をなさねばならぬ。之れに由りて力強き社會が現出される。即ち一切が労働者気分になる。而も一切が全般を理解して居る。さうすれば労働者と資本主との間も解決が出来る。又一切人民の間の意思の疏通が行はれて各人其の處を得ると云ふ状態になる。理想は何處迄も固定して居つては駄目である。デモクラシーの如くに唯平等を主張するのみであつては固定して居る。固定すれば

固定したものに對する反對がある。即ち社會に於て不平等があると云ふ事は是である。平等と不平等との調和は何處にあるかと云ふと一種の動的の傾向に存在して居るのである。

四

軍隊の戦争の如きは、戦争の單なる一方面に過ぎない。經濟戦争が今日に於ては最も重大なる者と成り來つて居る。けれども單り經濟戦争ばかりでない。所謂文明の戦争と云ふものがある。即ち文明の源泉の滾々として盡きず湧き出づる所の國が、一切を支配する位置に立つて來る。他の國は其の恩恵にばかり與つて居る。自然其國の下に附かなければならぬやうになつて來る。獨逸のアイスラーが言つた通り、國語と云ふものは一の資本である。國語を擴めると云ふことは、即ち資本を下ろすやうなものである。獨逸語を他國民に教へると云ふことは、他國に獨逸の資本を投するやうなものであつて、獨逸語を使ふ人間が多くなれば多くなるだけ、それだけ資本を投じたことになる。是は非常に面白い意味がある。即ち日本語を習ふ人間が多くなればなる程、日本の勢力が強くなる譯である。若し日本語を多く習はせんとすれば、日本の文明を高めるより外はない。日本人の發明に負ふ所が多ければ多いだけ、それだけ遙か日本の勢力が膨脹して行くのである。

労働者が現在の國家に重きを置かずして、労働者の國際的團體に重きを置くことと云ふことがあるとしたならば、是は極めて愚なることである。何となれば民族自決は今日に於て最も重大なる聲である。何と云つても日本の労働者と西洋の労働者と調和すると云ふことは萬が一にもない。ギッディングスの同類意識説も此理を證明して居るのである。又何れの國家と雖も他國の労働者の入り来る事を好まぬ。此は一切の状態ではないか。レーニン・トロツキーの如きすら、尙且つ自國の労働者を保護するけれども、他の國の労働者を保護しやうとは思はない。而して民族自決と云ふ聲と共に自國の民族に重きを置くことと云ふことは、即ち是れ同類を保護する所以である。此點に付ては何等哲學を要しない。何等説明を要しない。唯自分の生きんとする處の本能があれば、自ら自分の民族に附着して居る。戦争で自分は殺されまいと思つたならば、自分の屬する國旗の下に駆け込むに如くはないのである。自分の國家位自分を保護して呉れるものはない。民族が唯獨り自分を保護して呉れるものであるから、如何に労働者が國際的團體など云つても、是は平和の時代の話であつて、戦争となれば決して行はれるものではない。而して戦争は到底避くべからざるものである。されば人種と云ふ觀念は最も重大なるものであるから人種戦争に依ても亦大に

勝利を得ることが出来る譯である。例へば他國に向つて大に移民をし、其移民の数が千萬二千萬と増加して來たとすれば、其中に於て兵隊を募集することが出来る譯であるから此方から兵を送る必要はなくなつて來る。人種の戦争も此處に至つて甚だ妙味を感じる。血を流して人の國を奪ふは極めて拙なるものである。經濟を以て人の國を壓服せんとする是亦不仁なるものである。けれども文明に依て人を壓服するものは、是實に正々堂々たるものである。文明に依て他國を服しやうとするならば、即ち學問の研究が第一である。又我國固有の特色を發揮するのが必要である。従て人文主義として東洋主義と云ふことはどうしても免れない。此點から見ても筋肉を主とする労働も、知識を主とする労働もあるけれども、どの道知識を主とする労働を重んじて世界に類のないと云ふ高尚な發明をし、世界に發見せられなかつたと云ふ高尚な理論を編出すと云ふ事が必要であらう。單に筋肉に重きを置く労働者が五百萬あろうが、千萬あろうが、逆も斯様な高尚なる一大發明をなすと云ふことは出來ぬ。此高尚なる一大發明をなすのがそれが既に一の大勢力となつて來るのである。所謂文明戦争の意味を理解しなかつたらば話にはならない。要するに人文主義と云ふものは汪洋無限なる所の主義であつて、一切の人民をして悉く全體の觀念を養成せしめ、是に於て人格の平等を得機會の均等を期し、而も各人をして各々其處に於て其情性を

満足せしめんとするのである。此方針に向つて進まんとしたならば第一に教育である。教育にも學校教育あり社會教育ある。總ての教育が皆此方針に於て進まなければならぬ。又第二に政治上の組織であるが、此政治上の組織も此仕組に於て進まなければならぬのである。即ち普通選舉の如きものが是である。第三は一切社會の風俗習慣である。何をするにしても此様な心持を以てやらなければならぬと思ふ。

|| 終 ||

大正十三年十二月十五日印刷
大正十三年十二月二十日發行

人文東洋主義と社會改造奥附
(定價金貳圓參拾錢)

著者	遠藤隆吉
發行者	東京市麹町區飯田町四丁目二十番地 海老原丑之助
印刷者	東京市神田區表猿樂町十三番地 櫻村功
印刷所	東京市神田區表猿樂町十三番地 改文社

不許複製

發行所

東京市麹町區
飯田町四丁目二十番地

教文社

電話四谷四二一
振替東京三三七二四番

2582

~~535~~

~~33~~

終

